

令和4年度



交通安全

ファミリー作文コンクール 優秀作品集



警察庁

令和四年度交通安全ファミリー作文コンクール優秀作品集の発刊に当たって

皆様には、日頃から交通安全活動に御尽力をいただいておりますことに、厚く御礼申し上げます。

さて、昨年の交通事故による死者数は、二千六百十人で、警察庁が保有する昭和二十三年以降の統計で、六年連続で最少を更新しました。

しかしながら、今なお多くの尊い命が交通事故で失われていることには変わりなく、こどもが犠牲となる痛ましい交通事故や、飲酒運転をはじめとする悪質・危険な運転による重大な交通事故も依然として後を絶ちません。

交通事故は、国民の誰もが当事者となるおそれのある身近な問題です。安全で快適な交通社会を実現するためには、国民の皆様一人一人が交通ルールを守り、自動車や自転車の運転者、歩行者がそれぞれ相手の立場に配慮し、思いやりの気持ちをもつて交通マナーを実践していくなど、積極的に交通安全に関わっていくことが必要です。

「交通安全ファミリー作文コンクール」は、家庭、学校、地域等において交通安全について話し合ったこと、また、これらを通じて思ったことや感じたことなどについて、作文を通じて国民の皆様が共有することで、具体的な交通安全活動の実践につながる取組として四十四年の永きにわたり続いてまいりました。

依然として、新型コロナウイルス感染症の影響もあった中ではありますが、今年度も小学一年生から中学三年生まで四千八百六点の応募をいただきました。

本書は、その応募作品の中から、最優秀作（内閣総理大臣賞）をはじめとする優秀作品をまとめたものです。この作品集を通じて、国民の皆様が交通事故のない社会を願う気持ちを共有し、そのことが更なる交通ルールの遵守と交通マナーの向上につながることを心から期待しております。

結びに、本事業の実施に当たり、御協力いただいた関係の方々には厚く御礼申し上げます。

令和五年二月

警察庁交通局長 太刀川 浩一

△主催▽

警察庁

一般財団法人 全日本交通安全協会

公益財団法人 三井住友海上福祉財団

一般財団法人 日本交通安全教育普及協会

△後援▽

内閣府

文部科学省

△協賛▽

全国共済農業協同組合連合会（J A 共済連）

目次

《小学生の部》

最優秀作〔内閣総理大臣賞〕	
やさしいおうだん歩道の作り方……………	3
愛媛県愛媛大学教育学部附属小学校二年 大近 伊熙	
優秀作〔国務大臣・国家公安委員会委員長賞〕	
みどりのおじさん、ありがとう……………	4
愛知県長久手市立西小学校 一年 田中 遥馬	
おばあさんとのやくそく……………	5
茨城県結城市立結城西小学校 二年 寺崎 廉人	
雨の日の交通安全……………	7
東京都府中市立府中第五小学校 三年 飯塚 江柵	

合言葉は「ななめ」……………

埼玉県川口市立鳩ヶ谷小学校……………

四年 塚田 果南

事故をなくすために、できること……………

五年 八幡 葵子

徳島県徳島市加茂名南小学校……………

五年 八幡 葵子

ひき逃げ事故にあつて……………

六年 足立 堯子

新潟県新潟市立新潟小学校……………

六年 足立 堯子

優秀作〔文部科学大臣賞〕

私の通学路……………

……………

三重県度会町立度会小学校……………

六年 山下 真由

佳作〔警察庁交通局長賞〕

だれもかなしまないために……………

……………

東京都新宿区立柏木小学校……………

一年 田村 風葡

おはなのりゆう	15
茨城県結城市立結城西小学校	一年 寺崎 友里愛	
ちやんととまつてかくにん!	16
徳島県徳島市津田小学校	一年 和田 桃佳	
交つう安全への気もち	17
栃木県那須塩原市立東小学校	二年 鈴木 里歩	
はん長はたいへんです	18
茨城県筑西市立養蚕小学校	二年 原 杏奈	
ちゆう車場でのとびだしちゆう意	19
茨城県八千代町立安静小学校	三年 篠山 純希	
交通安全のルール	21
群馬県高崎市立国府小学校	三年 東野 瑞月	
命を守るヘルメット	22
栃木県那須塩原市立埼玉小学校	三年 前野 ちえり	

事故が教えてくれたこと	23
福岡県福津市立津屋崎小学校	四年 諫元 妃莉	
自転車の安全	25
東京都新宿区立四谷第六小学校	四年 佐野 遙	
自転車で楽しく出かけるために	26
福井県坂井市立東十郷小学校	四年 山岸 俐里花	
より安全な登校のために	27
和歌山県橋本市立城山小学校	五年 安藝 万莉菜	
そういう気持ちをなくしちゃおう	29
神奈川県川崎市立平間小学校	五年 石樽 沙衣	
副班長としてできること	30
香川県多度津町立四箇小学校	五年 森光 葵音	
身近に起きた交通事故から考えること	32
福井県鯖江市中河小学校	六年 栗田 創介	

私の願い……………33

香川県高松市立中央小学校 六年 田尾 奈愛

祖父から学んだ交通安全……………48

愛知県安城市立明祥中学校 二年 中根 孝弥

審査を終えて〔小学生の部〕……………36

宮田 美恵子

準備の大切さ……………50

愛媛県松山市立鴨川中学校 三年 榎山 颯空

《中学生の部》

最優秀作〔内閣総理大臣賞〕

交通安全啓発ポスター……………45

岡山県岡山市立岡山中央中学校 二年 渡邊 陽和

佳作〔警察庁交通局長賞〕

横断歩道……………53

栃木県宇都宮市立宮の原中学校 一年 小林 奏和

優秀作〔国務大臣・国家公安委員会委員長賞〕

七年間続けていること……………47

埼玉県さいたま市立大谷場中学校 一年 山崎 蓮

安全な地域をつくるために……………54

宮城県仙台市立将監中学校 一年 寺田 寧々

母と決めた通学路……………51

栃木県宇都宮大学共同教育学部附属中学校

一年 岩 佐 葵

発信したい「自中スタイル」	56
福岡県宗像市立自由ヶ丘中学校	二年 伊賀崎 望	
ドライバーとのコミュニケーション	57
栃木県宇都宮市立横川中学校	二年 知花 愛依	
世界の青色信号	58
財団法人ハワイ日本人学校レインボー学園	三年 遠藤 あかり	
安全の生まれ方	60
埼玉県越谷市立北中学校	三年 嶋屋 勝仁	
交通ルールに思いやりを	61
岡山県倉敷市立真備東中学校	三年 白神 咲羽	
審査を終えて〔中学生の部〕	64
鈴木春男	

小学生の部



愛媛県愛媛大学教育学部附属小学校

二年

おおちか
大近

ただおき
伊熙

やさしいおうだん歩道の作り方

ぼくのいえの前にはおうだん歩道がある。このおうだ

ん歩道はすごくべんりだ。ここをわたるとすぐにぼくの
大すきなうんていの公園があるし、妹のようち園のバス
のりばもある。でも、このおうだん歩道はちよつときけ
んだ。なぜなら信号きがないからだ。信号きがないから、
ビュンビュン走る車がなかなかとまってくれない。車に
ぶつかったら一かんのかわりだ。むこうへわたるのは一
くろうなのだ。お父さんが、
「伊熙だけや子どもだけではぜったいわたつたらいかん。」
と言っているくらいきけんだ。

おとうさんといっしょにわたる時も、右を見て、左を

見て、また右を見て車がとまってくれるまでまつ。手を
上げないと車がぜんぜんとまってくれないおうだん歩道
なのだ。

このべんりだけどきけんなおうだん歩道の近くには、
時どきけいさつかんがきてくれる。

白バイのつたけいさつかんだ。

「手をあげて気をつけてわたるんだよ。」

と手をふつてくれた。ぼくや妹がおうだん歩道を安全に
わたれるようにまもつてくれているつてお母さんがおし
えてくれた。

ぼくが車にのつていてしんごうきのないおうだん歩道
を見つけた時は、わたりたい人がいないかようく見るの
がやくそくだ。おうだん歩道の近くに人が立っているら、
お母さんは「あの人はわたるのかな？立ちどまっている
だけかな？」

と、とまるかすすむかまよつてしまうみたいだ。ぼくは、
おうだん歩道の前で手をあげていると「わたりたいよ！」
とつたわりやすいことをはっ見した。だからけいさつか
んもお父さんもおうだん歩道は手をあげてわたりなさ
いっておしえてくれたんだ。

それからは、ぼくと、お母さんと、妹と三人はおうだん歩道の前で手をあげる。妹は、右手も左手もあげている。お母さんがわらいながら車がとまってくれるのをまつ。手を元気にあげると、きけんなおうだん歩道だけど車がいっぱいとまってくれる。とまってくれた車のうんてん手さんにありがとうってにつこりおれいを言うのと、うんてん手さんにもにつこりしてくれる。わたらせてくれてありがとう！のうれしい気もちになる。

お父さんに、きけんなおうだん歩道は手をあげてわたるとすぐくやさしいおうだん歩道になるつてことをおしえてあげた。お父さんも手をあげれば車がやさしいおうだん歩道を作ってくれるからね。

ぼくは、これからおうだん歩道をわたる時は車をよく見て、手を元気にあげてわたろうと思う。いつでも車がつこりとまってくれるおうだん歩道をみんなでたくさん作りたい！

優秀作

国務大臣・国家公安委員会委員長賞

愛知県長久手市立西小学校

一年 田中 遥馬

みどりのおじさん、ありがとう

ぼくのおじいちゃんはみどりのおじさんのボランティアをしています。おじいちゃんはちいきの子どもたちがあんぜんにとうげこうできるように、あめの日もゆきの日もあつい日も、まい日つう学ろに立ってみまもつています。ぼくはなぜおじいちゃんはそのボランティアをづけているのかとふしぎにおもって、りゆうをききました。すると、おじいちゃんは

「じもとのひとへのかんしゃとおんがえしだよ。」

とおしえてくれました。

おじいちゃんはいえのきんじよには二つの小学校があります。そのつう学ろは、しゃりようつうこうきんしに

していされているのに、まもらないドライバーがたくさんいたそうです。子どもたちが、いつじこにまきこまれるかわからないというききかんから、ボランティアをはじめたとしりました。今では、じもとのおまわりさんときょう力して、まちのあんぜんをまもるかつどうをしています。

このまえのはるやすみにおじいちゃんはいえにあそびにいったときのはなしです。きんじよにある大きなこうえんをおじいちゃんがあると、小学生のおにいさんやおねえさんたちが、おじいちゃんに

「こんにちは！」

と、あつまつてきました。おじいちゃんは子どもたちからニックネームでよばれ、とてもたのしそうにおはなしをしていました。ちいきのこどもたちにしたわれているおじいちゃんをほこりにおもつて、ぼくはとてもうれしいきもちになりました。

ぼくはことし小学校ににゅう学しました。にゅう学するまではきがつかなかったけれど、ぼくのつう学ろにもみどりのおじいさんがまい日たつてくれています。ぼくたちのあんぜんは、みどりのおじいさんがまもつてくれています。

ることにきづいたのです。だからぼくにできることは、こうつうルールをまもることと、かんしやのきもちをこめてげんきよくあいさつをすることです。

きょうもげんきに

「いつてきまーす」

茨城県結城市立結城西小学校

二年

寺崎 廉人
てらざき れんと

おばあさんとのやくそく

ぼくのいえのとなりには、おばあさんが一人でくらししています。おばあさんのかぞくは、べつのばしょにくらしています。ぼくは、まいにち学校の話やともだちの話をおばあさんに話しています。おばあさんとぼくはとてもなかよしです。

おばあさんは、ぼくがあさ学校に行くのをみおくれたあと、さんぽに出かけるのがつかになっています。このまえ、ぼくが学校からかえったあとにおばあさんのい

えに行ったら、おばあさんがいつもより元気がないようすでした。ぼくが「どうしたの」とわけを聞いたら、おばあさんがさんぼのとちゆうにスピードを出した車にぶつかりそうになって、こわい思いをしたことを教えてくれました。

ぼくとおばあさんのいえの前には、大きなどうろにながるちかみちがあつて、そのみちをスピードを出してはしる車があるのできけんなのです。おばあさんは、さんぼに行くのがこわくなつてしまい、元気がなくなつてしまいました。

ぼくは、おばあさんにまたさんぼに行つて元気になつてほしいと思つておとうさんとおかあさんにそうだんしました。車が多くとおる時間にパトカーにパトロールをしてもらおうと話があつて、けいさつしよにおねがいをしました。パトカーがまいにちパトロールをしてくれて、スピードを出す車はいなくなりました。

おばあさんにきけんな車がいなくなつたことを話すと、よろこんでくれました。おばあさんをあんしんさせてあげるためにぼくはおばあさんといっしょにさんぼに行つてあげることにしました。おばあさんはぼくに、ま

いにちぼくが元気に学校からかえつてくるのをたのしみにしてると話してくれました。おばあさんは、ぼくはどうろできけんな思いをしてほしくないとつて、ぼくと三つのやくそくをしました。一つめはどうろにとびださないです。二つめは左右をよく見てどうろをわたるです。三つめはしんごうをまもるです。

ぼくはだいすきなおばあさんとのやくそくを学校に行く時やかえる時にきちんとまもつています。おばあさんもぼくとのやくそくをまもつてまいにちさんぼにいつています。

これからもおばあさんとの三つのやくそくをきちんとまもつて、こうつうじこにあわないうにしたいと思えます。そして、いつまでもぼくの元氣なすがたを見せたいです。

東京都府中市立府中第五小学校

三年 飯塚 江柳

雨の日の交通安全

今日は台風八号が来ています。きのう外出して駅から家に帰る時、すごく強い雨風でした。かさを風のふいている方にさしていたので、前がまったく見えませんでした。駅から家までは、二百メートルもないけど、すごくこわかったです。まったく見えなかったけど、たまたま自転車や車が来なかったので助かりました。それで、雨の日の交通安全について家族で考えてみました。

わたしの小学校では、雨の日はほとんどの子が、かさをさして通学します。わたしは、かさをさすとぬれないようにする事ががんばってしまい、周りをあまり見えない事に気がきました。小学校の横だん歩道には、毎日見守りの人がいるので、今まで事ここにあわずにすんでいます。これからは少しぐらいぬれてもいいから、もっと周りを見るようにしたいと思います。

次に、お母さんに雨の日に一番こわかった事を聞きま

した。お母さんは毎日、自転車で会社に行っています。お母さんが一番こわかったのは、雨の日に小学生三人が、かさをさして、わらいながら後ろ向きに走って来た事です。わたしはこの話を何度も聞いているので、すごくこわかったんだなと思いました。お母さんは、あぶない歩行者がいると、止まるようにしているらしいです。だけど、歩行者が気づかなかつたら、事ここにつながると思いました。

今度は、お父さんに雨の日の車の運転について聞きました。お父さんは、雨の日じゃなくても、ふだんから気をつけています。でも雨の日はしかいが悪くなるから、いつもよりもっと気をつけているそうです。

お父さんやお母さんの話を聞いていると、雨の日にはみんな気をつけているから、事ここは少ないと思っていました。でも雨の日の交通事故発生りつは、晴れの日のやく五倍になるそうです。わたしのそうぞうをこえていました。

雨の日の事ここは、どうしたらへらせるのでしょうか？わたしは、みんながいつも以上に気をつけられれば、事ここはへっていくと思います。自分の身を守るために、歩行者のわたしは、自分で出来る事から始めます。かさをさす

時は、前を見やすい角度でさす、車の運転手が見つけやすいように明るい服と明るい色のかさをさす、よく周りを見て音を聞くなど、すぐに出来る事がたくさんあります。みんなで事をへらしていきましょう。

埼玉県川口市立鳩ヶ谷小学校

四年 塚田 果南

合言葉は「ななめ」

「行つてらっしゃい。〃ななめ〃に気を付けてね！」

私のお母さんはいつも「ななめ」を強調します。この「ななめ」というのは、横断歩道に、車がななめ前やななめ後ろから曲がって入ってくることです。私の家では、出かける前の合言葉になっています。

私が小学生になる時に、お母さんが近所の横断歩道に連れて行ってくれ、気を付けることを教えてくれました。この交差点はカーブの先から急に車が飛び出して来るから特に気を付けてね、運転手さんと目を合わせてから渡

るのがいいね、などとお母さんに教わりました。私が手をあげて渡っているのを見て、かなみは小さいから、手をあげて自分の存在をアピールするのはいいことだよ、とほめてもらいました。

お母さんと一緒に横断歩道を渡って気づいたことは、ななめから曲がって入ってくる車がけつこう多いことです。しかも車は急に曲がって私に近づいてくるので、車がちやんと私の前で止まってくれるのかとても心配になりました。右・左・ななめと、いろんな方向から車が来ないか常に注意しながら渡らなければなりません。横断歩道を渡るのにこんなに緊張したのは初めてでした。

この時からずっと、私は「ななめ」を意識して生活していました。最近ふと「なんでお母さんはそんなに〃ななめ〃を気にするんだろう。」と疑問に思ったので、聞いてみることにしました。

すると、お母さんから聞いた話は、命についてのしよげき的な話でした。中学生の時に一緒に帰っていた友達達が「ななめ」から来た大型トラックにはねられたこと。お母さんのほんの数メートル先を歩いていたら友達が急に目の前からいなくなったこと。その時の、血の気が引い

た感覚や光景を今でもはつきりと覚えていること。また、お母さんは、運転めんきよを持っていくのに怖くて運転できないと言っていて、もしかしたらこの時のことがトラウマになっているのかもしれないと話してくれました。

私はこの話を想像したしゅんかん、言葉が出ませんでした。それに、前は、運転は楽しいイメージでしたが、お母さんの話を聞いて、命がかかっている運転は、責任重大で決して気軽なことじゃないという考えに変わりました。

でもそんな時お父さんが「ルールを守れば運転は楽しいよ。」と言ってきました。車を運転している人から見ると、横断歩道を歩いている人は視界に入りづらいことや、身長が低い人は車に隠れて見えないことがある危険について、お父さんから教わりました。みんなで話し合い、私が「車も歩行者もどちらも気を付ければ事故を防げらると思う。」と言ったら、賛成してくれました。

私はまだしばらく車を運転する側にはなれません。今、歩行者としてできること、「右・左・ななめ」「運転手と目を合わせる」まずはこの二つに気を付けて過ごしたいと思います。家族が大切に思ってくれている、私の命を守るために。

徳島県徳島市加茂名南小学校

五年 八幡 葵子

事故をなくすために、できること

令和三年十二月、学校から帰るとテレビで事故のニュースをしていました。私と同じ徳島県に住んでいる小学四年生の女の子が、登校中にトレーラーに巻き込まれて亡くなったというニュースでした。そのとき私は四年生で、年も同じだったので人ごととは思えませんでした。青信号で横断歩道を渡っていたのに、どうして事故になるのか、不思議でした。母に聞くと、

「横断歩道の信号だけじゃなく、車の方の信号も青だから、車が曲がって来たんだよ。」

と言いました。そして、車には「死角」といって、運転席から見えない場所があることを教えてくれました。

私は「死角」と聞いてもよくわからなかったのですが、実際に車の運転席にすわってみることにしました。母には車の左横に立つてもらいました。左のミラーには、母の姿がうつっています。母が、

「葵子、ちょっと右のミラーも見て。」

と云うので、私は右のミラーを見ました。もう一度左のミラーを見ると、母の姿がありませんでした。どこに行ったのかと思って探すと、その場でしゃがんでいただけでした。一歩も動いていないのに、ミラーにうつらなくなつて、運転席からは全く見えなくなることにおどろきました。

母と車に乗っていると、左折の前に必ず聞かれることがあります。

「葵子、自転車が出来ないか、後ろを見て。歩いている人がいないかも、見て。」

と云うのです。私はどうして毎回同じことを聞くのか、意味がわからなかったので「自分で見ればいいのに。」と思っていました。母は、私と一緒に「死角」の確にんをしていたのだと気付きました。今まで、不思議に思っていた母の言葉には、大切な理由があったのだと思いました。

夏休みに、事故のあった交差点に行ってみました。すると、歩車分り式信号に変わっていました。横断歩道の信号が青なら、車の方は絶対に赤なので、安全だと思いました。でも、いくら信号が新しくなつても、ルールを守らなければ、また事故が起きてしまうのではないか、

とも思いました。信号がとつくに赤になつているのに、スピードを上げて、交差点にとつ入してくる車をよく見かけるからです。横断歩道の信号は、もう青になつているので、とてもあぶないと思います。運転手さんには、信号が赤になつたらきちんと止まってほしいし、横断歩道の手前では、止まって確にんをしてもらいたいです。そして私は、信号が青でも車が止まってくれないかもしれないと思つて、左右をよく確にんしてから、横断歩道を渡りたいと思います。そうすれば事故がなくなつて、悲しい思いをする人もいなくなると思います。

新潟県新潟市立新潟小学校

六年 足立あだち 堯子しょうこ

ひき逃げ事故にあつて

夏休みの初日、私はひき逃げ事故にあいました。その日、好きなアイドルグループのCDを買いに一人で出かけていて、帰るのが少しおそくなつてしまつていまし

た。横断歩道の信号が青に変わって、音が鳴り始めたのを聞いてから小走りでもわたり始めたら、横断歩道の真ん中辺りで、赤信号無視をして突進して来た車にはねられました。私は、買ったばかりの大事なCDの方が心配で、すぐに飛ばされてしまったCDが入ったバッグを取りに行きました。その時に、車は一旦止まって、運転手がこちらを見て目が合いましたが、そのまま逃げて行ってしまう。

どこにどうぶつけられたのか全然覚えていなかったのですが、幸い軽傷で済みました。でも、次の日からしばらくは、首から足首まで全身が痛かったです。それよりも、今でも車にひかれる夢やひいた犯人の顔が出てくる変な夢を毎日のように見てしまって、なかなかよく眠れません。

今回このような事故にあって、とてもおどろいています。と言うよりも、「なぜ？」という気持ちが大きいです。青信号になってしばらく経っているのに、なぜひかれたのか？なぜこんな目にあったのか？自分がよく通る、人も車も多い大通りで、なぜ犯人は逃げて行ったのか？しかも一旦停まったのに。なぜ犯人はつかまるまで自首して来なかったのか？

疑問は消えませんが、せつかくなのでこの事故から何か学べることはないかと、お母さんと話してみました。

まず、決して信号無視はしないこと。次に、いくら青信号でも、常に前後左右に気を付けて横断すること。それから、特に自転車に乗っている時には、逆に自分が加害者になる可能性もあるので、あまりスピードを出さないこと。そして、もし人にぶつかってしまった時は、知らんぷりをしないこと。周りの大人にも声をかけて助けをもらって、警察にちゃんと知らせること。念のために救急車を呼ぶこと。これは、自分が事故を目撃した時にもそうすること。

私がひかれた時も、近くにいた人たちがたくさん協力してくれました。私にかけ寄って来て安全な場所に移動させてくれた人、警察に連絡してくれた人、救急車を呼んでくれた人、警察に目撃証言をしてくれた人、ドライブレコーダーを提供してくれた人など、たくさんの人たちのおかげで、私は助かったし、犯人もすぐにつかまりました。もちろん、警察や救急隊の人たちのおかげでもあります。ちゃんとお礼を言える場がなかったのです。この場を借りてお礼を言いたいです。

みなさま、あの時は私を助けてくださって、本当にありがとうございます。おかげさまで、夏休みが終わって、私は元気に学校に行っています。



優秀作

文部科学大臣賞

三重県度会町立度会小学校

六年 山下 真由やました まゆ

私の通学路

私の学校は、徒歩通学とバス通学の二種類あります。私は、徒歩で一番遠い地域に住んでいるので、歩いて四十分くらいかかります。一年生のころは、ランドセルが重くて毎日がとても大変でした。そして、暑い日や寒い日などは、通学バスが私達の列をぬいていくと、とてもうらやましく思ったりしました。

私の両親も同じ小学校に通学していたのでどんなのだったのかを聞いてみました。父は今の私より、遠い地域から通っていて片道三kmあったそうです。母は、私と同じ通学路だったそうです。

「今は、歩道がきちんと別れているし、安全だからいいね。」

と、母は、言いました。

「今と、お母さんのときはちがうの？」

と聞くと、

「お母さんのときは、全員徒歩で、バス通学はなかったよ。それに、車道に線を引いただけの歩道で、車がギリギリ横を通っていったし、見守りの人もいなかったよ。だから、雨の日とか気をつけないと危なかったよ。」

と、教えてくれました。

毎日通っているから、何も気にしなかったけど、両親のときとずいぶんちがうんだなと思いました。今は、きちんと歩道が作られています。それに、最近では、ガードレールのようなポールも作られています。

「おはよう!!」

「おかえり!!」

と、元気なあいさつで私達を見守ってくれる地域の人達もいてくれます。私の通学路は、いろいろな形で守られていることに気づきました。

私は、今、六年生です。私の通学班は、全員で十六人です。そのうち、低学年は六人です。毎日、六年生が班長・副班長になり、安全に気をつけながら、通学しています。

私が一・二年生だったころも、高学年のお兄さんお姉さんといっしょに、通学していました。私たちの安全に気をつけながら、先導してくれていたのだなと気付きました。今度は、私たちが低学年の子達を、安全に気をつけながら、いっしょに登校する番です。私達のすがたを見て、今度は、低学年の人が安全に次の新入生と共に通学してくれたりいいなと思います。

私の通学路は、大人の人達の見守りや歩道を整備してもらったりと、いろんな『安全』への気持ちがかもっているんだなと思いました。私がこの通学路を歩くのもあと少しとなりました。卒業まで、交通安全に気をつけて楽しく通学したいなと思いました。

東京都新宿区立柏木小学校

一年 田村 風葡

だれもかなしまないために

「あぶないよ」

ことしのはるごろ、ぼくのおとうとが、いえのまえの
どうろで車にひかれそうになりました。車が見えたので、
ぼくは大きなこえでちゅういしたけど、きかずにどうろ
のむこうにはしっていつてしまいました。おかあさんも
とてもおどろいておとうとのところへすぐにいき、ぜつ
たいにとびだしてはいけなないとつよくいつていました。

もし車にひかれてしまったらしんでしまうかもしれない、
い、もしそうならおかあさんはとてもとても、もの
すごくかなしい。おかあさんだけでなく、おとうさん
も、おばあちゃんやおばさん、だいすきないとこのおね

えちゃん、おともだちもみんなかなしむからです。それ
と、うんでんしゅさんがわるくなくても、ひとをひいて
しまったら、けいさつにつかまってしまつて、いえにか
えれないこともあるとおしえてもらいました。それは、
その人のいえの人もかなしむだろうなとおもいました。

とても、あぶなかつたのでどうしたらよかつたのか、
かぞくではなしをしました。

一、げんかんをあけるときは、さいしよにすこしあけ
て車にあいずをする。

二、げんかんをでたら、とびらをしめて右左をよく見る。
三、車が見えるところまできていたら、だいじょうぶ
だとおもわないで、車がおつてからはんたいのほうに
わたる。

四、くらいときは、車からはあるいている人がわかり
にくいので、はんしゃばんのついているベストをきる。

ぼくは、でかけるときにはおとうとにこえをかけて、
はなしあつたことをまもつてすごしています。だれもか
なしのおもいをしないためにもずつとまもつていきま
す。

一年 寺崎友里愛

おはなのりゆう

わたしは、ことししょうがく一ねんせいになりました。このまえ、おとうさんとこうえんにいくときに、どうろにおはながおかれているのにきづきました。わたしは、なんでどうろにおはながおかれているのかふしぎにおもっておとうさんにききました。おとうさんから、このどうろでこうつうじがおきてしんでしまったひとがいることをおしえてもらいました。おはながおかれていたりゆうは、かなしいりゆうでした。

おとうさんから、どうろにはきけんがいつばいあって、こうつうじこでかなしいおもいをしているひとがいることをおしえてもらいました。それから、テレビでまいにちじこがおきていることをしりました。しょうがつこうで、このまえ、こうつうあんぜんきょうしつがありました。わたしは、いえのちかくでこうつうじこがおきていたことをしっていたから、けいさつかんのおはなしをし

んけんにききました。けいさつかんから、おうだんほどのわたりかたとどうろにはぜつたいにとびだしてはいけないことをおしえてもらいました。おとうさんとおかあさんに、こうつうあんぜんきょうしつでおしえてもらったことをはなすと、「とてもたいせつなことだからわすれないでね。」といわれました。

わたしは、どうろにおかれていたおはなのりゆうをして、こうつうじこがたくさんおきてることやかなしいおもいをしているひとがたくさんいることをしりました。こうつうじこにあわないうようにけいさつかんからおしえてもらったことやがつこうのせんせいとかぞくにおしえてもらったことをきちんとまもって、こうつうじこにあわないうにします。

ちゃんととまつてかくにん！

わたしは、とうこうするときは、おねえちゃんといっしょにいけます。げこうは、とちゅうまでむかえにきたおかあさんとかえります。おかあさんが、

「にゅうがくしたばかりでひとりでとうげこうするには、しんぱいだから。」

といつて、なるべく、わたしがひとりにならないようにしました。わたしは、

「だいじょうぶだよ。ひとりでいけるよ。」

といったけど、おとうさんにもしんぱいされていたので、まだひとりでいったことがあります。ひとりでだいじょうぶなのになというきもちでいっぱいでした。

あるひ、おかあさんとかえっているときにわたしは、いえのちかくで、くるまにはねられそうになりました。おかあさんがよこにいることにあんしんしていました。くるまがおる大きいみちにてたのに、さゆうかくにん

することをわすれて、そのまままえにすすんでしまいました。おかあさんがあわてて、

「とまりなさい！」

といつてわたしをとめました。わたしのまえを、スピードをだしたくるまがとおりますぎました。そのようすをみていたきんじよのひとたちが、

「びつくりした。こわかった。」

「じこにならずよかった。」

といつて、おどろいていました。

おかあさんに、

「ちゃんととまつて、みぎ・ひだりかくにんしなさい。」といえにつくまでも、いえにかえつてからもなんともいわれました。わたしは、つきからはちゃんとかくにんできるとおもっていました。けれど、わたしはまたおなじみちで、あぶないめにあいそうになりました。わたしはちゃんとかくにんできてるつもりでした。わたしは、ひだりをみながらまえにすすんでいました。ひだりからは、くるまもじてんしゃもきていなかかったからです。みぎから、じてんしゃがきていました。

「はんたいがわもみないと、じてんしゃがきてる、か

栃木県那須塩原市立東小学校

二年 鈴木 里歩すずき りほ

くにしながらすすんじやダメ。」
と、おかあさんにちゅういされました。

そんなことがあってからは、くるまがとおるみちにくると、①とまる、②みぎ、③ひだり、④くるまきてないからすすめ！と、こえにだしてかくにんするようになりしました。わたしは、きけんなめにあつたことで、まずは、ちゃんととまることと、みぎもひだりもりようほうかくにんしないといけないことのだいじさがよくわかりました。

これからも、ちゃんととまって、さゆうをかくにし、こうつうあんぜんにきをつけたいです。そして、おとうさんにも、おかあさんにもひとりでだいじようぶだとあんしんしてもらえるように、がんばりたいです。

交つう安全への気もち

わたしは、下校の時にかならず校長先生に言われることがあります。

「じこにあわないうように、どうろにとび出さないように気をつけてかえってください。」

二年生になつてから、ブロック下校の時には一ばん前を歩くようになりました。一年生がわたしの後にいるので、しっかりついてきているかかくにんをするようになりました。いつもおかあさんやおとうさんのうしろにいて、いるから自分が前を歩くのはドキドキします。スパーへ行ったり、出かけた時におかあさんに、

「右左をきちんとかくにんしないとあぶないよ。はしらないでわたつてね。」

と言われることを思い出して、一年生をつれて歩くのがんばっています。

あと一つわたしが心づよく思っていることがあります。

茨城県筑西市立養蚕小学校

二年 原杏奈

はん長はたいへんです

す。それは、ボランティアさんのそんざいです。いつもとなりについていてくれてすこしドキドキしていた心があつというまになくなってしまふほどあんしんします。車がよこを通る時に、わたしたちのよこに立つて手を広げ、

「車が通るからあぶないよ。気をつけてね。」

と言つてまもつてくれます。ほんとうにありがたいです。

どうろのきまりをまもることを教えてくれる先生、やさしいボランティアさんがわたしの交つう安全の力づよいみかたです。でも、一番は自分の心だと思ひます。交通安全にぜつたい気をつけるぞと思ひわたしの心です。

わたしの学校では、校長先生と学校の子ども全いで「一人に一つ大せつないのち」と、大きな声で言うことがなもり回もあります。わたしは、自分の大せつないのちをまもりたいです。そのためにも、交つう安全に気をつけたいと思ひます。

わたしは、二年生になり、一・二年生下校のときは、下校はん長をするようになりました。

はじめて一・二年生下校となる前に、わたしは、お父さんとお母さんと三人で下校のときに気をつけることを話し合いました。

そして、三つのやくそくをしました。

まず、一つ目に気をつけることは、はん長になったら、今までどちがい、前の人についていくだけではないので、前後・左右と、まわりをよく見て歩くことです。

二つ目は、かならず一れつになつて歩くことです。

三つ目は、スーパークラスミの前を通るときは、かならずとまつて、車がこないか、よくかくにんをすることです。

また、歩道でも、歩くばしよについて、気をつけるようにも言われました。

わたしが歩く歩道には、さくらの木があり、歩道が木

のねで、でこぼこしています。きよ年わたしは、木のねにつまずきころんでしまったことがあり、そのとき、ころんだいきおいで、あと少しで車道にとび出てしまいそうになったことがあります。

また、べつの日のあさには、歩道をはしってきた中学生のじてん車が、わたしたちとう校はんをよけようとして、ころんでしまったこともありました。

そのため、お父さんとお母さんから、

「木のねで、でこぼこがひどいところでは、歩道でも、車に近いほうではなく、車からはなれたグレーの「そここう」の上を歩いたほうがあんぜんだよ。それに、歩くときは、かならず一れつで歩くようにね。」と、言われました。

そして、下校はん長の日がやってきました。

わたしは、お父さんとお母さんとのやくそくをまもり、歩きました。

いままでは、はん長のすぐ後ろをついていくだけでしたが、一ばん前を歩くはん長は、前のしんごうやじてん車を気にしたり、後ろの一年生を見たりと大へんでした。歩くペースも、後ろを見ながらゆっくり歩いたり、少し

休けいをとったりと、今までのように前の人についていくだけではないので、とても大へんでした。

とくに一年生の男の子は、かってに休けいをとって、みんなでおうだん歩道をわたろうとしてもわたれず、のこってしまいました。

わたしはそのあと、ずっとその男の子と歩き、こうつうじこにあわないう気をつけました。

これからもみんなとこうつうじこにあわないう、こうつうルールをまもり、あんぜんだいでとう下校するようがんばります。

茨城県八千代町立安静小学校

三年 篠山 純希しのやま あつ希

ちゅう車場でのとびだしちゅう意

わたしは、デパート、スーパーマーケットのちゅう車場でも、交通事こにならないために、ちゅう意をして歩くことは、とても大切なことだと思っています。実さい

に、弟が車にひかれそうになった事があるからです。

ある日の出来事です。わたしは、お母さん、弟、妹の四人でスーパーへお買い物に出かけました。

「お母さん、おかしを買ってもいい？」

「いいよ。一人一こね。えらんでおいで。」

毎回する、わたしたちとお母さんの会話です。スーパーへ行く楽しみは、好きなおかしを買ってもらえることです。夕方の時間だったので、お客さんがたくさんいて、お会計のレジもこんでいました。

「ねえ、まだなの。おなかすいた。早くおうちに帰りたい。」
弟が、まちくたびれている様子でした。わたしも同じ気持ちでした。やっとお会計が終わって、お店の出口を出ました。りょう手に大きな物を持ったお母さんと、かた手におかしを持ったわたしたちは、車へ向かってちゅう車場を歩きはじめました。「家に帰ったら、おかしを食べられる」私の心はウキウキしていました。でも、その後にぞっとする体けんをしたのです。

「はい、止まって。車こないね。まっすぐすすむよ。お母さんから、はなれないでね。広がらないようにね。走らないよ。ほら、くっついて歩いて。」

と、お母さんはしゃべりつづけます。いつものことです。ちゅう車場には、買い物物にきた車や帰る車が、何台も走っていました。わたしの家の車が見えてきました。もう少して車にと到着するという時です。弟がきゆうに走り出して、動いている車の前を横切りました。

「あぶない。」

お母さんの大きな声が、ちゅう車場にひびきました。急ブレーキをした車の運てん手さんと、お母さんのびっくりした顔は、今でもわすれられません。わたしも、声が出ないくらいのいっしゅんの出来事に、とてもおどろきました。「心ぞうが止まるかと思った」って、こういう事なんだと、実感した日になりました。

その日の夜に、弟がどび出しをして車にひかれそうになった話を、お父さんにしました。そして、家族五人で話し合つて、決まりを作りました。一つ目は、ちゅう車場ではぜつたいに走らない。二つ目は、大人のそばをはなれないように歩く。三つ目は、買ったおかしは家に帰るまで手に持たないで、手をつないで歩く。四つ目は、車の運てん手さんは、止まってくれると思わない。今までは、何も考えずにお母さんの後ろを歩いていただけの

私でした。それが、一番安全だと思っていたからです。でも、お母さん一人が子どもたちのいのちをまもるだけではなく、子どものわたしたちも、自分で自分のいのちをまもることが大切な事だと思いました。また小さい弟や妹のためにも、わたしがよいお手本になりたいです。

群馬県高崎市立国府小学校

三年 東野 瑞月
ひがしの みつぎ

交通安全のルール

「交通安全」道を歩いたり、車に乗ったりしている時に、よく見かける言葉です。何度も見たり聞いたりする言葉なので、のぼりやかんばんなどにこの言葉が書いてあっても、今まで気にしたことはありませんでした。

三年生になってすぐくらいのことです。私は、習い事が終わり、お母さんのおむかえを待っていました。いつもは、終わる時間にはかならず来てまっています。私に、その日はまってもまってもぜんぜん来ません。私は

不安な気もちでいました。それでもまっていたら、お母さんがやつと来ました。

「ごめん、事があつたみたいで、車がぜんぜん動かなかつたんだよ。」

とお母さんが言いました。帰り道、近くを通るとつづれてへこんだ車が見えきゆうきゆう車とパトカーがとまっています。私たちは

「こわいね、気をつけないとね。」

などと言いながら、そこを通りすぎました。私は、かたい車がつぶれているのを見て、とてもショックでした。そして、自分や家ぞくが乗っている車もし事にあえば、あんな風につぶれてしまうのか、と考えたらとてもこわくなりました。あのつぶれた車に乗っていた人も、自分が事にあうなんて思っていなかったと思います。事は、いつもと同じように生活していても、ちよつとした不注意でおきてしまいます。道でみかける「交通安全」という言葉は、みんなが気をつけることをわすれないようにあるのかなと思えました。私も、あの事を見ながら、「交通安全」という文字を見ると、気をつけようと思うようになりました。

6月に交通安全教室がありました。「右・左・右・後ろ」と安全をかくにんして自転車に乗ることを教えてもらいました。私は、今まで「右・左・右」はかくにんしていたけど、「後ろ」をかくにんしたことはなかったのが後ろもかくにんするひつようがあることを知り、びっくりしました。そのほかに、信号が赤になった時の正しい待ち方も教えてもらいました。今まで知らなかったのを教えてもらってよかったですと思いました。自転車も自動車も事がおきないようにみんなが守るルールがあります。でも、ルールを知らなかったり、わすれたりすると、守ることができません。自転車や自動車は、べんりなので、あたり前のように乗ってしまいますが、運転する前に「交通安全」のルールを思い出して、事がおきないように一人一人が気をつけなければいけないと思います。

栃木県那須塩原市立埼玉小学校

三年 まえの前野 ちえり

命を守るヘルメット

三年生になって、初めて自転車の交通安全教室がありました。私は、祖父に新しい自転車とヘルメットを買ってもらいました。でも私は、なぜヘルメットをかぶるのか、分かりませんでした。大人が自転車に乗る時、ヘルメットをかぶっていない事を知っていたからです。あつい日には、汗もかきます。頭も重く首もきゅうくつです。だから私は、ヘルメットをかぶりたくありませんでした。休日に私は、兄と一緒に住宅街の道路で、自転車に乗って遊んでいました。新しい自転車に乗ってうきうきした気持ちでした。ある時、側こうにつまずき、自転車が突然倒れてしまいました。その時自動車が走って来ました。幸いに、自動車と反対側に倒れたので、自動車とは接触しませんでした。しかし私は、ひざをすりむき、足にあざができました。自転車のカゴもへこんでしまいました。その時私は考えました。もし自動車側に倒れていたらどうなってい

ただろうと。事故にあい、大ケガをしていたかもしれないと思いました。そこで私は、看護師の母に自転車に乗る時、ヘルメットをかぶる理由をたずねてみました。

「大切な命を守るためだよ。」

と母は答えました。でもどうして頭を守る事が命を守る事になるのか、これを聞いただけでは、はっきりとは分かりませんでした。頭をケガするとうなるか、もつとくわしく質問してみました。頭には体の様々な命令を司る脳がある事、頭をケガする事でたくさんの障害が起きる可能性がある事を教えてもらいました。私は年長の時に園でもらった「しぜん・からだ」の本で調べてみました。脳がダメージを受けると動く事や物を見る事、においを感じる事など、ふだん私が生活でしている事ができなくなってしまう可能性がある事を知りました。大好きな自転車に乗る事は、乗る分危険な事もひそんでいる事が分かりました。

この事がきっかけで、私は、自転車の安全にきょう味をもちました。夏休みに、自転車屋で開きいしている「安全乗り方教室」に参加しました。そこでは、少しでも安全に自転車に乗るための、正しいヘルメットのかぶり方、

ルールや事故の要因についても学びました。

自転車は、移動や健康のためのすばらしい乗り物で、私たちの生活にかかせない物です。しかし、無理な運転や、ルールを守らない事で、大きな事故につながる事もあります。少しでも安全に、楽しい自転車ライフを送るために、何よりも自分自身の安全への心がけが大切であると気づきました。そのために私は、ヘルメットを必ず正しくかぶり、自転車に乗りたいと思います。また友人にも、ヘルメットの大切さを伝え、とうとい命を守るために、今自分ができる事をしていきたいと思っています。

福岡県福津市立津屋崎小学校

四年

諫元 妃莉

事故が教えてくれたこと

「青信号で横断歩道を渡つていても車が通るかもしれない。」

「車に乗る時はシートベルトをきちんと付けなさい。」

事故にあつて死んでしまつたら皆に会えなくなる。」

父はいつも同じ事を口うるさく言います。日曜日の夜にけい察二十四時のテレビ番組が放送されている時は、父の口うるさい注意がさらに倍増します。あー、うるさい。テレビ番組の中の事故なのに、私におこつたことのように危ない危ないと注意してきます。注意の言葉を聞くことさえめんどくさいと思つていました。

事故はテレビの中だけのものだと思つていたのに、ある日、私も事故にあつてしまいました。母と妹と私の三人でいつものように車に乗り赤信号で止まつていた時、ドンツというしやうげきと共に、体が前にガクツとなりました。実さいには、何がどうなつたかわからなかつた。と表現した方が正しいかもしれません。後ろの車から追突されたのです。事故の後は首や体が痛かつたのも大変でしたが、すごく怖かつたのを覚えています。

「自分がどれだけ注意していても事故に巻き込まれる事がある。」と、父が言つていたことが初めて分かりました。シートベルトを付けていたので、首が痛くなつただけで済んだのもよく分かりました。「横断歩道を渡る前は車がないか確認しなさい。」「車に乗る時はシート

ベルトをきちんと付けなさい。」と、何回も注意してくれていた父を、うるさいと思つてしまつてごめんなさい。父のおかげで、事故にあつてもみんな無事だったんだなと思ひました。

今年の夏休みに、体験学習に当選して福岡県けいの通信指令室を見学しました。通信指令室は、県内全ての110番を受けている所で、私が見学している時も次々に電話がかかつてきていることが分かりました。一日に約千五百件程の電話があり、その中の多くが交通事故だそうです。想像よりはるかに多くの事故があつていることを知りびつくりしました。

自分が交通事故にあい、110番の電話を見たことで、交通事故に対する意識が変わりました。いつものように注意してくれる父をうるさいとは思わなくなりました。テレビの事故を見ても、なんでこうなつてしまったのだろう、どうすれば事故にならなかつたのかなと、父と一緒に考えるようになりました。横断歩道を渡る時は、前よりもつと、車がないかを確認するようになりました。車に乗つたら、妹にもシートベルトを付けてあげるようにしています。妹が一年生になつたので、手をつな

いで横断歩道の渡り方をしっかり教えてあげています。大きな車からは、小さな私達が見えないことがある。という事も新しく勉強しました。自分が、どれだけ注意している、事故に巻きこまれる事がある。ということをお忘れずに、これからは、私が父のかわりになつて、妹に教えてあげたいです。

東京都新宿区立四谷第六小学校

四年 佐野さの遥はるか

自転車の安全

私は、今年の七月に交通安全子供自転車東京大会に選手として出場しました。優勝はできなかつたけれど、練習で学べたのでとてもよい経験になりました。そして今まで知らなかつたことやあぶないことなど教えてもらい、いつもより自転車が上達した気分になりました。

自転車に乗る時、一番気を付けている事は降り降りする時に後ろを確認することです。後ろに人がいたら足が

当たってしまう場合があるので常に気を付けています。そして止まる時、ブレーキは左側からかけて次は右側をかけることです。なぜなら右側は前の車輪のブレーキなのでひっくりかえってしまうことがあるからキケンです。なのでこれも特に気を付けています。

私が聞いてびっくりしたことは、道路で曲がる時に手を使つてサインをする事です。後ろから見て左に曲がる時は右手をL字の様な形に、右に曲がる時は漢字の一のような形にします。止まる時は、手をななめ下にのびします。これらを覚えるのはむずかしいので、特別な合言葉を自分で工夫して覚えました。

その後二段階右折の仕方を教えてもらいました。まっすぐ行つたあと曲がる前に降りてから自転車の向きをかえて後ろを見てから乗るべきという事がわかりました。

私が苦労したのはひょうしきです。たくさんのひょうしきを覚えるのにとても苦労しました。例えば、自転車横断帯のひょうしきの意味が分からないとどうしたらいいかわかりません。そのために、全部覚えるようにこれからがんばりたいと思います。

とても忘れがちなルールは、踏切では降りてから通る

事です。いつもは乗ったまま通っていたので反せいでいます。

私は、自転車の正しく安全な乗り方を知りませんでした。わすれがちなふみきりのわたり方や、ひょうしきなどを覚えられるようにこれからも練習して、自転車のことをなんでも知っている大人になって、小さい子供たちを教えるあげたいです。そして、これからも気を付けて自転車を楽しく乗りたいです。

福井県坂井市立東十郷小学校

四年 やまぎし 山岸 りりり 俐里花 か

自転車で楽しく出かけるために

四年生になってから、校区内で自転車に乗ってもよくなったので、自転車に乗ることが多くなりました。家から少しはなれた所に住んでいる友達と遊んだり、歩いて行くのは遠くて行けないお店におやつを買いに行ったり、楽しいことがたくさんあります。自転車で出かける

時に、お母さんはいつも心配そうにわたしが見えなくなるまで、いつまでも見送っています。わたしが自転車に乗って出かける時に気をつけていることや、家族で決めているルールをしようかします。

一つ目は、自転車に乗る時は、ヘルメットをかぶりまです。バランスをくずしてたおれた時や、事ここにあつてしまった時に頭を守ってくれる大事なものです。

二つ目は、雨の日や雨がふつてきそうな時は、自転車に乗りません。雨で道路がぬれているとすべりやすくなっていたり、雨で周りが見えにくくなったりしてあぶないことがあると思うからです。

三つ目は、交差点では信号が青でもすぐにはわたらないことです。曲がってくる車がないか、大きなトラックがないか必ずたしかめるようにしています。わたしのお父さんは仕事で大がた車に乗ることがあります。その時に、死角がでてきて見えないことがあるので、交差点でトラックが曲がろうとしている時は、わたらずに待っているように教えてくれました。交差点では注意することがたくさんあるので毎回きんちようします。でも、自分の目でしっかりかくにんするようにしています。

和歌山県橋本市立城山小学校

五年

安藝^{あき} 万莉^ま菜^{りな}

より安全な登校のために

四つ目は、友達といっしょに乗る時はならんで走行しないことです。おしゃべりにむ中になってならんだり、広がったりして乗っていると車の通行のじゃまになります。また、自転車同士がぶつかって、バランスをくずしたりたおれたりしてあぶないと思います。

自転車で安全に出かけるためには、注意しなければなりません。学校に登下校の時は、みまもりたいの方が交差点で見えてくれるけれど、放後や休みの日は自分の目で見て安全を守るしかありません。なれた道路でも毎回きんちよう感を持つて気をつけるようにしています。無事に元気に帰った時、家族の「おかえり」を聞くと、今日も一日楽しかったなあと思つて、うれしくてあたたかい気持ちになります。これからも、元気に楽しい毎日をすごせるように安全に自転車に乗りたいです。

「私の毎朝の行動は正しいのかな。」

ふと、自分に問いかけました。

私は毎朝、集団登校をしています。今年になって、通学路の歩道整備が終わり、歩道が広くなって、ガードレールもつけられました。それまでの歩道は二人ならぶのがいっぱい、車道までのきよりも近く、通学時間はたくさん車やバイクも通るので、「スピード早くて怖い。」と思つたり、車が急に出てきてびっくりすることがよくありました。でも、歩道整備がされたことで、少し車とのきよりができたように思い、以前より危険ではないように感じるようになりました。

私のお母さんは、毎日私の通学路の横の道路を走つて通勤しています。登校中の子どもがいるので、スピードを出さないように、横断歩道は子ども達が安全にわたれるようにとても注意して運転をしているそうです。そん

なお母さんは、

「良かったね。誰かが危ないからガードレールをつけてって言うってくれたのかな。登校中の子ども達に車がつつこんでしまった死亡事故もあるし。」

と安心した様子で言いました。調べてみて、過去五年間で約九百人が登下校中に事故で死亡したり、大けがをしていると知りました。過去十年間に十件以上の、車が子どもにつつこんでしまったという悲しい事故も知りました。子どもの事故の三分の一が登下校中で、特に下校中が多いと知りました。私の集団登校では、地域の見守り隊の人達が学校まで一緒に行ってくれて、信号も安全にわたらせてくれます。見守り隊の人達がいてくれるので登校中の事故が下校中に比べ少ないのではないのかと思い、見守り隊の人達に感謝の気持ちでいっぱいになりました。

私は、集団登校が好きです。理由は、友達とわいわい楽しく話をしながら行けるからです。私は、登下校中の事故で多くの子どもが死んでいると知って、「私の毎朝の行動は正しいのかな。」と自分に問いかけました。車の危険から私達を守るためにガードレールをつけたり、歩道を広くしてくれました。でも、自分自身も気を付けなければなり

ません。友達と話をしていたら、話に夢中になって見守り隊の人が「危ないよ」と言ってくれても気付かないかもしれないし、他の子が危険な時、気付かないかもしれせん。集団登校は、みんなで注意して安全を確保するためだと思います。そのために、自分に出来ることは意識して取り組みたいと思います。登校中は会話をせずに、周りに注意をはらったり、車から見えやすいように手を挙げて横断歩道をわたって、自分の命を守りたいと思います。また、高学年として低学年を守る存在になりたいです。危ない場所を歩いていたら「そこくだから危ないよ。」と注意がけをしたり、地域の人の話をきいていなかったら、代わりに伝えようと思います。私の行動一つ一つが自分や、だれかの身を守ることにになると良いです。

神奈川県川崎市立平間小学校

五年 石樽沙衣いしくれ せえ

そういう気持ちをなくしちやおう

「わたっちゃえ そういう気持ち なくしちやえ」

これは、私の家の近所の電柱に貼られている交通標語です。この標語が貼られるようになってから、私は横断歩道での交通マナーを気にするようになりました。

この標語を初めて目にしたのは、約三ヶ月前の習い事の帰り道でした。信号がある横断歩道でいつものように信号待ちをしていると、電柱に貼ってある文字がふと目に入りました。それは、私の通っている小学校の三年生が書いた交通に関する標語でした。そこには「わたっちゃえ そういう気持ち なくしちやえ」と書かれています。私のことだ、と思わずさげびそうになりました。それくらい、自分の行動に思い当たることがたくさんあったからです。このままでは私もいつか事故にあつてしまふと急に怖くなり、今までの自分の行動を反省してこの標語の意味を意識してみようと思えました。

まずは、今までの自分の行動をふり返ってみることにしました。私の行動で一番多かったのは次のような場面です。塾に向かう時、乗りたい時刻の電車があるので、その電車に間に合うように駅に着きたい。だから、横断歩道の青信号が点滅し始めていても「ええーい、わたっちゃえ。」と思って、ダッシュで走りわたる。とりあえず無事にわたれたし、「ああよかった、これで間に合うじゃん。」と思いきや向かう。

ついやってしまっていたこの行動が今思えば、何て危険な行動だったんだろうと反省しました。

家族でこの話題になった時、「青信号が点滅していると、早くわたらなきゃって思っちゃって、まだ横断歩道に差しかかっているのにちよつとはなれた所からでも小走りになってたなあ。」とお母さんが話してくれました。

「わたっちゃえ」と考えていたのは、私だけではなく大人でもそう思ってしまうんだなと分かり、ではどうすればそういう気持ちがなくせるのだろうかと考えてみることにしました。

結局ほとんどの行動が、急がなきゃという気持ちから起きていたのではないかと思いました。急がなくてもい

いようにするには、信号待ちを一回しても十分間に合うように家を出ればいいのです。私が「わたっちゃえ」と行動していたあの横断歩道の青信号の点滅から次の青信号までの時間を計ってみたら、約一分四十秒でした。ほんの一分四十秒分の余ゆうをもつだけと分かり、家を出る前の準備を少しだけ早くし、青信号が点滅しても「ゆとりがあるから大丈夫」と意識して足を止めるようにしてみました。それでも思わず青信号の点滅をわたろうとしてしまい「だめ。止まろう。」とハッとしたり、慣れるまでは時間がかかりました。でもすっかり習慣化した今は、一緒に歩いている家族にも「止まらなきゃね」と声をかけられるようになっていきます。

香川県多度津町立四箇小学校

五年 森光 葵音

副班長としてできること

わたしの通っている四箇小学校は、毎日集団登校で学校に行っています。わたしは、四年生から登校班の班長をしていて、今の班は低学年の子が五人で、全体で十一人もいます。学校までは近くて信号もなく、歩いて十分弱のきよりです。

わたしは、初めて副班長になった時は、ただ腕章がつけられてうれしいなあという気持ちでした。しかし、昨年六月に起きたニュースを見て、交通安全をしつかり考えていかないといけないと思いました。そのニュースは、千葉県でトラックが下校中の小学生の列に突っ込んで、小学生の二人が亡くなり、一人が重体で他にも大けがをしているものでした。そして、トラックの運転手は、仕事の帰りにお酒を飲んでいたので運転して、事故を起こしたそうです。

ニュースで流れる映像を見て、ドキドキし、何も言葉

にできないぐらいのしよげきを受けたのを今でも覚えて
います。

次の日、いつものように登校班で学校に向かう私は、
昨日とは何も変わらない状況なのに、すれ違う車にとて
も怖いと感じました。

わたしは、副班長として安全に登校するには、どうし
たらいいのか改めて考えました。みんなが安全に登校で
きるために、大きい道路に出る前や、大きい車とすれ違
う時には止まったり、低学年の子が歩く歩幅に合わせた
り、おしゃべりして二列になる子を注意したり、班長と
協力しないといけないことがたくさんあることに気づき
ました。今までは、後ろからついて行くだけだった自分
がとてもはずかしく感じました。

交通事故は、いつどこで起こるかわかりません。歩行
者がどれだけ気をつけていても、千葉県の新ウースのよ
うな運転手がいたら起こってしまいます。亡くなった子
もその家族もまさかこんなお別れが来るなんて、朝の登
校の時に想像できなかったでしょう。そんなこと悲しす
ぎます。交通ルールを守ることはもちろん、歩行者や車
は、お互いに思いやりの気持ちをもつこと、そして、慣

れた道でも、いつどんなきけんがあるか分からないと注
意していくことが大切です。みんながそういう思いでい
ると、悲しい出来事が少なくなるとわたしは思います。

毎日、安全に登校できるために、たくさんの人達がか
かわってくれています。笑顔で送り出してくれる家族、
立しよう当番の保ご者や地域の方々、パトロールしてく
れるおまわりさん、「おはよう」と迎えてくれる先生に、
感謝する気持ちをもつことも大切なことだと改めて気づ
きました。

もうすぐ二学期が始まります。副班長として、これから
もみんなの安全を守り、大切な命を守っていききたいです。

福井県鯖江市中河小学校

六年 栗田 創介

身近に起きた交通事故から考えること

九百十二。これは福井県で二〇二一年に起きた交通事故の数です。一日に約二・五件も事故が起きていると思うと、とても怖くなりました。さらにインターネットで調べてみると、人口十万人当たりの交通事故の死者数は、福井県は三・三九人と全国で八番目に多いと分かりました。福井県に交通事故が多いというイメージが無かったので、とてもおどろきました。また、過去五年間で見ると、交通事故で亡くなった人の十二・四パーセントが自転車乗車中に事故にあっているということも分かりました。

今年の七月から「福井県自転車条例」が施行されると知った時、僕は自転車の運転まで保険に入る必要があるのかなと疑問に思いました。でも、僕は施行されるずっと前から保険に入っていたそうです。驚いたのと同時に、僕の家族は交通事故への意識が高いということが分かり、うれしく思いました。そして、僕自身も交通安全への意

識を高めるきっかけとなった出来事が二つあります。

一つ目は、僕の祖母が二回も事故にあってしまったことです。一回目は、祖母が車を運転していた時、車同士でぶつかりました。その時、僕は近くで習い事をしていたので、その部屋の窓から、田んぼに落ちている祖母の車が見えてとてもショックでした。二回目は、祖母が横断歩道を渡っている時に車とぶつかりました。祖母が言うには、車とぶつかった時に一回転したそうで、僕は見ていなかっただけで、事故の怖さが伝わってきました。幸い、二回とも祖母に大きなケガは無かったけれど、祖母は

「とても怖かった。」

と話していました。僕が住んでいる地域は田舎で、交通事故もめったに起こらないと思っていたけれど、どこでもだれでも事故にあうかもしれないという当たり前のことを実感させられました。

二つ目は、僕のおつちよこちゃんな性格についてです。家でも学校でも周りを見えていなくて、物をけつたり物にぶつかったりすることがあります。その性格のせいで、僕が乗っていた自転車が歩行者と接触してしまったことがあります。ブレーキをかけて停まろうとした時に、

前にいた歩行者に触れてしまったのです。スピードが出ていなかったので、相手にケガはなかったのですが、申し訳ない気持ちでいっぱいになり、自転車に乗るのが怖くなりました。

僕は中学生になったら、自転車で通学することになります。今までと比べ乗る距離も長くなるし、一人での通学は心細くて怖いけれど、基本的な交通ルールをしっかり守って、安全に楽しく通学したいです。車も自転車も、便利な乗り物であると同時に危険な乗り物でもあります。そのことをしっかりと理解して、事故防止に努めたいです。

香川県高松市立中央小学校

六年 田尾 奈愛

私の願い

「危ない。よけて。」

私は、お母さんの声に驚きながらも急いで歩道横の花だんのレンガの上に飛び乗った。すると、すぐ歩道を車

が走ってきた。見ると、高齢のおじさんが運転していた。おじさんは、広い歩道を、車道と間違えたのだろう。自分が歩道を走っていることに気付いていない様子だった。もちろん、私達が歩いていたことにも気付いていなかった。あと一秒、一步逃げるのが遅かったら、と考えるとき、怖くなった。

最近、高齢者による運転事故が増えている。注意力や集中力が低下していること、判断力が低下していることが考えられる。高齢者だけでなく、誰でも考え事をしていたり、安全確認をおこたってしまう時もある。高齢者の一人暮らしで、運転をたのめる人がいなかったり、スーパーや病院、交通機関が近くになかったりして、どうしても運転しないといけない人もいる。でも私は、少しでも運転に不安があれば免許返納するべきだと思う。免許返納をすることで、タクシードライバーやバスの割引きなどの特典を受けることができる。そして、少しでも、高齢者の運転事故を防ぐことができると思う。不便な生活になるだろうからそれには、地域で支える必要があると思う。

私も、自転車に乗ることが多い。急いでいるときは、何度か怖い目にあつたこともある。いつも、自転車や徒

歩で出かける時、お母さんから

「自分だけが注意して交通ルールを守っていても事故に巻き込まれてしまう事もあるから、『さだろう』ではなく『さかもしれない』と考えて行動するように。」

と言われている。交差点で車が曲がってくるかもしれない。急に人が飛び出してくるかもしれない。車が止まってくるだろうではなく、止まらないかもしれないと考えて行動するようにしている。

少しの気のゆるみで、自分が加害者にも被害者にもなってしまう可能性がある。歩道を車が走ってきた時のように、予測できない事が起きるかもしれない。私が体験した小さな危険から、交通安全を意識するきっかけももらったと感じている。

将来、自分が車を運転する立場になったら交通ルールやマナーを守り、心と時間にゆとりを持って運転したい。事故を起こしてからでは遅いので運転に少しでも不安があれば、運転は控えるようにしたい。

一人一人の命を大切にして交通事故のない世の中になっほしい。

審査を終えて

NPO 法人日本こどもの安全教育総合研究所理事長 宮田 美恵子

小学生の部

小学生の死者重傷者の総数は、減少傾向にあるものの、令和三年六月に千葉県八街市の通学路などにおいて、深刻な死亡事故が起っています。そうした中、日本でも令和二年一月には一般的に認知されるようになった新型コロナウイルス感染拡大、いわゆるコロナ禍なども影響したのか、交通安全ファミリー作文コンクールにおける小学生の部の令和元年度応募作品数は二千二百九十七点、令和二年度は六百二十六点、令和三年度は八百九十五点であったものが、今（令和四）年度は千百九十二点と増加に転じたのは嬉しいことです。

これは子どもたちが家族とともに交通安全について向き合い、考える時間を持つことで安全への意識を高め、安全行動につながる大切な安全教育の機会をもった家庭が増えたことになります。こうしたコンクール本来の意義をご理解いただき、取り組んでくれた子どもたち、小学校や地域、保護者など関係する皆様に感謝申し上げます。

審査にあたり、一つひとつの作文を読み、子どもらしい新鮮な気づきや瑞々しい発想、素朴な疑問、幼いながらも微笑ましい周囲への気遣いなど、それぞれの魅力にふれることができました。また、作品からは、家庭で交通安全の課題について話し合い、それを実践する子どもたちの普段の生活も垣間見えるようでした。登校の班長や副班長、兄弟姉妹の長子として、また交通空間を使用する一員として、それぞれの立場による責任感や緊張感にふれ、私は子どもたちの日々成長する「姿」を頼もしく思ったのです。審査員全員が、子どもた

ちの作品に順位をつけることの難しさに直面したに違いありません。コンクールでなければ全てに二重丸プラス花丸を付けてあげていたことでしょう。作品はどれも比べようのない素晴らしいものでした。そうした中で、とりわけ心に残ったことがあります。受賞作品にも共通することなのですが、それは「姿」です。

たとえば、信号機のない横断歩道を渡るときには、横断歩道の前で手を挙げて、「わたりたいよ！」という思いがドライバーに伝わりやすいことを発見した児童がいました。その後、お母さんと作品の筆者である僕と妹の三人は、いつも横断歩道の前で手を挙げるようになります。体の小さい妹は、右手も左手も、つまり両手を挙げています。その「姿」にお母さんが笑いながら、みんなで車が止まってくれるのを待ったということです。その文章からは、渡りたいという気持ちになかなか伝わらないもどかしさや、止まってくれない車への苛立ち、ややもすると信号が点滅していても急いで渡ってしまおうとするような、目先のことだけに向きのちな状況を明るく和ませてくれる「姿」が伝わってきました。

そしてそれだけでなく、その子どもたちの「姿」は、ドライバーさんに「渡りたい」という気持ちを伝えました。なかなか渡れない信号機のない危険な横断歩道は、「どうぞ」、「ありがとう」という気持ちを通い合う、安全で優しい横断歩道に変わったのです。体は小さくても、その「姿」は、大人の心を優しく変える力を持っていることをうかがわせます。

また、ある一年生の筆者は、帰省した時に自分のおじいちゃんが雨の日も雪の日も、暑い日であっても、毎日通学路に立っていることを知り、その「姿」になぜだろうと疑問をいただきました。数日後、同筆者は公園に行った時、自分より上級生である子どもたちが、僕のおじいちゃんに「こんには！」と挨拶して集まっていた。「姿」を目にします。さらに、おじいちゃんは子どもたちに親しみのこもったニックネームで呼ばれていました。自分のおじいちゃんは大変慕われているのだと、筆者は感じたのです。その「姿」に、筆者はまたしても疑問をいただきますが、何やら誇らしさとうれしさも同時に感じます。

そして、小学校に入学した筆者は、自らの地元でも、ボランティアとして子どもたちを守ってくれる、おじいちゃんのような人の存在に気づきました。祖父の「姿」をボランティアさんに重ねること、筆者は疑問に答えを見出します。そして、自分たちは、子どもたちの安全を心から願ひ、熱い思いをもって毎日通学路に立っていている人たちに見守られていると気がつきます。さらに筆者は、そうした方々への感謝の気持ちを表すために、自分でできるのは、「毎日ぼくの元気な姿を見せることだ」と考えるのです。おじいちゃんが見せた「姿」、上級生であろう子どもたちが見せた「姿」、そして感謝の気持ちとして見せる自分自身の元気な「姿」といった、様々な人の「姿」が作品から立体的に浮かび上がります。

これら様々な姿がある中で、交通安全ボランティアに関わる方々の「姿」にもふれたいと思います。地域の交通ボランティアさんは、通学路等の安全において、欠くことのできない存在となっています。

たとえば、現在九十歳近くになった方は、六十歳で定年し地域で交通安全活動を始めたそうです。初めてのうちはそうでもなかったものの、毎朝、自分の体より大きいようなランドセルを背負ってワイワイと言いながらやってくる子どもたちの姿を見て、「この子たちは自分が守る！事故は絶対に起こさせない！」という強い思いを持つようになったと言います。それから三十年ほど、この方は雪の日でも休みなく通学路に立つてくださっています。

またある方は、永年に渡り子どもたちに自転車乗車時のヘルメット着用を呼びかけ、事故を起こさせないことを信念として通学路に立つてきました。そのご努力もあつてか、この地域では交通死亡事故ゼロを更新してきたものの、残念ながら昨年一件の事故が起こってしまったのです。落胆する気持ちを奮い立たせ、その日からすぐ、さらに立哨時間や見守りエリアを増やすなどして、子どもを守るために、交通死亡事故ゼロを一日でも長く更新させようと頑張つて下さっています。

ただし、このように子どもたちを身近で見守ってくれるボランティアさんの「姿」は、何気ない、当たり前

の光景にしてしまえば、子どもたちの心には何も残りません。その姿が語るもの、つまりどのような思いや願いが込められているのか、なぜ、雨の日も雪の日も、毎日通学路に立つことができるのか、ということに思いを馳せ、疑問を抱くことによって、子どもたちは考えます。そして、自分なりの答えを導くことができるでしょう。その「姿」に内包された、子どもを守りたいという熱い「思い」や強い「願い」に自ら気づくことによって、「自分にできるのは」と次の行動を考えさせることにつながっていきます。その考えは、彼らの信念となつて実行されるようになるだろうと思います。すなわち、日々、ボランティアさんの「姿」にふれること、それ自体が安全教育と言えます。子どもの周囲の大人たち、たとえば保護者や先生、地域の人などが、気づきのきっかけを与えることも必要です。相手の考えに気づくことによって、「優しい横断歩道」が創り出されたり、見守り手と見守られる子どもとの信頼関係が構築されることにより、交通空間の安全性が高まっていきます。安全は一日にしてならず、一人ひとりが手作りしていくものです。子どもたちがそれぞれの家庭でこうした機会に出会っていくことが交通安全ファミリー作文コンクールの大切な意義でもあります。

今回作品を読み、子どもたちにはその力が備わっていると強く感じました。作品の中には、家庭での安全教育によって、日々の生活の中での出来事を自分に引きつけて考え、自分の行動が他者のためになり、みんなの安全につながっている、と考えを発展させるような、素晴らしい作品も多く見られました。自分の安全を自分で守れる、他者の安全に配慮できる、みんなの安全のために協力できることは、まさに安全教育が目指すところです。

このように、様々な人の「姿」すなわち「思い」は、一つひとつを言葉で教えなくとも、周囲の人々に気づきをもたらし、行動変容させる力となります。地域など身近なところにある、その「姿」に気づく、気づかせ「わが家の安全教育」を、これからも多くのご家庭で実施してほしいと願っております。

最後になりましたが、審査にあたり、小学校教諭経験者等の審査員により真剣で活発な審議がなされ、最優

秀作（内閣総理大臣賞）、優秀作（国務大臣・国家公安委員会委員長賞）、優秀作（文部科学大臣賞）、佳作（警察庁交通局長賞）の決定に至りました。御尽力くださいました事務局および関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

令和4年度交通安全ファミリー作文コンクール審査員 — 小学生の部 —

(敬称略、順不同)

宮田美恵子	NPO 法人日本こどもの安全教育総合研究所理事長
宇田川 光雄	NPO 法人子どもの夢と思い出作り舎副理事長 NPO 法人東京児童文化協会理事
小池 夏子	全国公立小・中学校女性校長会会長
入谷 誠	一般財団法人全日本交通安全協会専務理事
幸田 徳之	一般財団法人日本交通安全教育普及協会専務理事
田村 真一	内閣府政策統括官（政策調整担当）付参事官（交通安全対策担当）
安里賀奈子	文部科学省総合教育政策局 男女共同参画共生社会学習・安全課長
日下 真一	警察庁交通局交通企画課長

中学生の部



岡山県岡山市立岡山中央中学校

二年

渡邊 わたなべ 陽和 ひより

交通安全啓発ポスター

私は四人姉妹です。夏休みに入ると、四人のうち少なくとも一人が「交通安全啓発ポスター」を一生懸命描きます。

まず、ポスターに描く題材について、家族会議が開かれます。家族それぞれが怖い思いをした経験や、目撃した危険行為について真剣に討論します。私たち四人姉妹は年齢が幅広いのに加え、親も話し合いに参加するため、徒歩通学、自転車通学、電車通学、車通勤など違った場面での様々な危険行為を目の当たりにします。

このように話し合いを進め、たくさん出た意見の中から自分が一番危ないと思った行為への啓発を題材にしポ

スターを描いていきます。そして、それを伝えたい相手を想いながら標語、絵、構図を考えます。悩みに悩んで何日もかけて描き上げるのです。

「スマホを操作しながらの運転」、「飲酒運転」、「信号無視」、「歩行者妨害」など私たちはたくさん交通安全啓発ポスターを描いてきました。

しかし私たちはふと、私たちが真剣に取り組んで完成させたこのポスターは、車を運転する大人たちの心に届いているのだろうか。そして、このポスターによって交通違反や交通事故は減ったのだろうか。と思ったのです。

私の家は大きな交差点と大通りに面している関係で、登下校の時にたくさんの車がパトカーに追いかけられるのを目撃し、夜中にはパトカーのサイレンの音がうるさいほどに聞こえてきます。交通ルールを守らない人がなんと多いことかと実感する毎日です。

そして、私たちはまた家族会議を開き、交通違反を止めるため、この鳴りひびくパトカーのサイレンを止めるためにはどうしたらいいのかと話し合いました。

そして私たちは考えました。大人たちは私たちがこんなに一生懸命ポスターを描き上げ想いを届けようとして

いることに気が付いてくれているのだろうか。本当はこの交通安全啓発ポスターは大人たちも描くべきなのではないか。ということです。

ここで一つ提案です。免許更新の時、違反のある方は自分が犯した違反についてのポスター作製が義務付けられ、ポスターを提出しなかった場合は新しい免許がもらえない、というのはいかがでしょうか。

真っ白な画用紙に向かい自分の違反を十分に反省しながら標語を考え、構成を考え、描き上げる。これを義務化することで、繰り返される違反行為は数を減らしていくだろうと確信しています。

そして私たちの宿題である「交通安全啓発ポスター」は、「自転車の正しい乗り方」や、「横断歩道で注意すること」、「歩きスマホの危険性」などの自分たちが犯しやすい交通違反を題材にするのが効果的だと思います。

大人も子供も自分が注意するべき交通違反は自分で啓発する。そうすることで今まで私たちが大人の運転ルールについて一生懸命描いたけれど伝わらなかったポスターたちは、自分たちの交通ルールに焦点をあてて描くことで役割を果たしてくれると思います。

ぜひ私たちのこの提案が皆さんに届いてくれたら嬉しいと思います。



優秀作

国務大臣・国家公安委員会委員長賞

埼玉県さいたま市立大谷場中学校

一年 山崎 蓮

七年間続けていること

横断歩道で止まってくれた車にお礼を言う。それは僕が小学一年生の頃からずっと続けていることです。目を見て、ありがとうございますと一礼して渡っています。きつかけは、周りの友達がお礼を言わないことに疑問を抱き、母に相談したことから始まりました。

「ねえ、何でみんなは車が止まってくれたのにお礼を言わないんだろう、言った方がいいよね?」「そうだね、お礼を言われた人達がまた止まってあげようって思ってくれるかもしれないから、いいことだと思おうよ。」「そうだよね、じゃあこれからもお礼を言うようにしよう。」「こんなやりとりがあつてから、お礼を心掛けるように

なりました。それからは、誰も言っていなくても、僕はお礼を言い続けました。すると周りの友達が自然とお礼を言うようになったのです。その時は続けてきて本当に良かったと思いました。自分の行いが周りの人に影響を与えたかもしれない、そう思うとほんの少し自分を誇らしく思いました。もつとみんながお礼を言うようになれば、お互い気持ち良く譲り合える街になるのではない、色々調べてみました。

すると、信号機のない横断歩道で一時停止した車の割合調べというものがあり、埼玉県は四十七都道府県中三十七位という残念な結果でした。その中で長野県の気になる記事をみつけました。なんと長野県はこの調査が始まってから、二位に大差をつけ六年連続一位になっているのです。なぜここまで一時停止率が高いのか、長野県警の話によると、交通取り締まりや交通安全協会の活動は他県と変わらないようですが、長野県では子供の登下校時に、横断歩道で車を止めて待つてくれた運転手に子供がお辞儀をする習慣が三十年以上続いているのとこのことでした。実際に、この方の娘さんは小学生の頃からずっとお辞儀をしていたそうです。

愛知県安城市立明祥中学校

二年 中根 吉弥なかね いちや

祖父から学んだ交通安全

「子供の頃から横断歩道で止まってくれた車にはお辞儀をすることが習慣になっていると、大人になって自分でハンドルを握るようになったら自然と横断歩道では一時停止するようになるんです。」と、実体験からのお話はとても説得力があると思いました。長野県では、横断歩道で歩行者と運転手がコミュニケーションをとるという習慣が長い時を経てすっかり根付いていて、素晴らしいと思いました。

この記事を見て、自分が続けてきたことは間違いじゃない、そんな確信を得た気がしました。自分がお礼を言い続けることによって周りの友達が、そしてまたその友達が、少しずつでもそんな習慣が広まっていつか長野県のように多くの人が当たり前に道を譲り合える、思いやりのある街になってくれたらと思います。

だから僕は、これからもお礼を言い続けます。

僕の祖父は退職するまで交通課の警察官だった。小さい頃から色々な事を教えてくれた。祖父のおかげで僕は今まで事故なく成長する事ができている。例えば自転車。「つま先が出ている靴で乗らない。」

夏休みはビーチサンダルで乗りたい時もある。でもいつも祖父の言葉を思いだしスニーカーで乗っている。事故は必ず相手がいるわけではない。自分の身を守るために気をつけている事の一つである。突然クイズを出される事もある。

「車とぶつかっていないけど、車に驚いて転んでしまいました。さあ、どうする?」

僕は、

「ぶつかっていないなら、そのまま立ち去る。」

と答えた。すると祖父は、

「絶対に運転手さんの連絡先を聞く。もし車が行っ

ちゃったならナンバーを覚えなきゃダメだ。もし転んだ時に頭を打っていたら？その時は大丈夫でも夜になったら症状が出る事もある。ぶつかってなくても、それは事故だ。すぐに大人に言わなきゃダメだ。」

小学校に入学する時に出されたクイズだ。でも僕はとても印象に残っている。

「車が出てくるかもしれない。」

と、常に頭の中にある。僕の家まわりは、細道が多いので自分で身を守るために気をつけている事の一つである。

「シートベルトは命を守る。」

そんな事は誰でも知っている。僕は、シートベルトをしていない事故の悲しさを祖父から学んだ。助手席に座った時は必ずシートベルトをする。後部座席に座った時はシートベルトをしているのだろうか？

「シートベルトしないと事故にあった時、窓をやぶって外に飛ばされるぞ。外に飛ばされたら、後続車にひかれるぞ。」

祖父の言葉には重みがある。いろんな事故を知っているからだろう。最初は、

「僕が外に飛ばされるなんて、ありえないだろう。」

と、思っていた。でも祖父は、

「壹弥だけじゃない。大人だって事故の衝撃で簡単に飛ばされる。首の骨だつて折れちゃうんだぞ。事故は一瞬だ。後悔は一生だ。」

やっぱり祖父の言葉には、重みがある。自分の身を守るために、どの席でもシートベルトをするくせがついた。学校へ行く途中、信号のない横断歩道を通る。朝はなかなか車が止まってくれず焦る時もある。

「あの車が来る前に渡れる。」

と、思う時もある。でも車が止まってくれた事を確認し運転手さんに

「ありがとう」

と、目を合わせ頭を下げて渡る。ゆずり合う気持ちやありがたうの合図をするのも自分の身を守る事の一つと教わったからだ。

準備の大切さ

「うわっ！」

前を走っていた友人が、自転車ごと一回転し、転倒してしまいました。

中学一年生の時の出来事です。卓球部に入部した私は、初めての大会で、部員のみならず遅れないように急いで自転車を走らせていました。会場までの道がわからないため、一生懸命先輩達について行きました。その時の焦りが影響したのかもしれない。あつという間でした。

段差にさしかかった時、先頭を走っていた友人の自転車のカゴから水筒が道路に落ち、友人は急ブレーキをかけました。後ろを走っていた私も慌てて急ブレーキをかけましたが、さらに後ろの友人に押され、ぶつかってしまっただけです。転倒した友人は、足をケガしてしまい大会に出ることができませんでした。

帰宅後、事故について母に話すと、とても心配してく

れました。もし車道に転倒していたら、命にかかわる大きな事故になっていたかもしれません。そう思うと、改めて怖さを実感しました。

事故の原因について家族で話し合った結果、原因は三つあると考えました。

一つ目は、初めて行く場所までの下調べをしていなかったことです。信号や横断歩道の場所、細い道の有無、交通量の多い場所などを把握し危険を回避します。一度試走を行っていれば、今回の段差を事前に確認することができたと考えます。

二つ目は、時間に余裕がなかったため、スピードが出ていたことです。目的地まで何分かかかるか知らなかったため、先輩の、

「間に合わない。」という言葉に焦りを感じ、自転車をこぐスピードを上げてしまいました。もつと時間にゆとりを持ち、どれくらいかかるか把握しておくことで、気持ちに余裕をもたらすことができたと考えます。

三つ目は、自転車の車間距離が近かったことです。前後とも約三センチメートルくらいしかなく、後ろとは何度かぶつかりました。みんな急いでいたため、自然と

距離が近くなっていました。そのため、急ブレーキに対して対応できず、玉突き事故のようになりました。車間距離を約二メートル以上あけることで、お互いの安全を確保できると考えます。

後日、卓球部では、自転車の前カゴに物を入れないこと、荷物はリュックサックで背負うか、後ろの荷台にヒモでしっかりとくくりつけることになりました。

事故は突然起こるものですが、必ず何か原因があります。今回の体験で、日頃から事故の起きやすい状況や対策を考えておくことで、防げることに気づかされました。私は、自転車に乗る前に、必ず準備をすることになりました。そうすることで、自らの安全や家族や周りの人の大切な命を守っていききたいです。

優秀作

文部科学大臣賞

栃木県宇都宮大学共同教育学部附属中学校

母と決めた通学路

一年

岩佐

葵

「行つてきます」

「行つてらっしゃい。ヘルメット被つた？車に気を付けて。急がなくていいからね。」

母と私の毎朝のルーティンだ。母に見送られながら出発する。自宅を出てすぐに上り坂という最悪な通学路だ。上りはスピードが落ちる分、ふらふらしてしまう。なるべくふらつかないように、足に力を入れる。

自宅から学校までの最短ルートは、細い道が続く。通勤時間と重なっており、仕事へと急ぐ車が猛スピードで走り抜けていく。その風圧で倒れそうになったこともある。信号がない交差点で渡りたいときは、車が途切れる

のを待つしかない。自宅から学校までの片道四キロの道のりがこんなに危険で大変だと知ったのは、入学前に母と試走した日だった。

小学生のときはバスと徒歩で通っていた。バス停から小学校までは、細い道だったが、保護者や地域の方が見守ってくれた。中学生になると自転車通学が許可されたため、私も自転車通学とした。そこで、入学前に一度自転車で学校まで行ってみようとなったのである。私が前を走り、後ろから母がついてくる。出発して早々に上り坂に負けてしまい、自転車を押すはめになった。坂を上りきり、さありスタートだと思ったのも束の間、前には歩行者、後ろからは車が来るといふ、私には難易度の高い状況になってしまった。焦る私に母が叫んだ。

「危ないと思ったら、とりあえず止まりなさい！」

どうしよう、どうしようと考えながらも無意識にペダルをこぎ続けていた私はブレーキをかけた。止まった私の横を車が通りすぎていった。その後も母の声は続いた。段差に気を付けて、その角から車が出てくるよ、下じゃなくて前を見なさいなど、学校に到着するまで母の声は後ろから聞こえ続けた。帰り道は別のルートを通ること

にした。どの道が一番安全で走りやすいのかを見極めるためである。少し遠回りになるが歩道と自転車道と車道がしっかりと区別され、段差が少ない新しい道だ。自宅に戻ってから母と相談し、帰り道のルートを通学路にした。その理由は三つある。一つは広い歩道と自転車道が完備され、歩行者と自転車および自動車がそれぞれ安全に走行できることだ。次にほとんどの交差点に信号がついている点だ。信号がない交差点では、お互いに譲ってくれるだろうと思いついで衝突する可能性がある。三つめは道路沿いに店舗や住宅が多く、何かあったときに助けを呼びに行ける環境ということだ。そして、ヘルメットを必ず被ることも約束した。これは学校との約束でもある。髪型が崩れるとか夏は暑いとか文句を言ってる場合ではない。何かあったときにヘルメットを被っていないかったら命を落とす可能性だってある。それぐらい、自転車で乗るといふことは危険と隣り合わせなんだと身をもって知った試走会だった。

今日も私は力強くペダルをこぎ出す。焦らずに安全運転でいこう。

佳作

警察庁交通局長賞

栃木県宇都宮市立宮の原中学校

横断歩道

一年

小林 奏和
こばやし かなと

僕は以前、横断歩道を渡りました。そのときに、視覚障害者の方が男性と一緒に歩いているという出来事がありました。これは初めてみた光景だったので、家族に話すことに決めました。

夕食の時間に家族に横断歩道であった出来事を話しました。そうすると、父が、

「障碍のある人でも、誰かと一緒に渡れば安心だし安全だね。」

と言いました。そうすると母が、

「その通りだと思うよ。もしあなたがそういう場面にあつたら、その人を助けてあげなさい。」

と言いました。そのときは元気よく返事を返しましたが、心の中ではそんなことが自分にできるか不安でした。

三日後、以前した話も忘れていたころでした。ちょうど自分が渡ろうと思っていた横断歩道で、視覚障害者の方が渡ろうとしていました。僕は最初、時間も掛かるし、少し面倒くさいので、自分だけ横断歩道を渡ろうと思いましたが。しかし、この前、母に言われた言葉を思い出しました。そのとき僕は、声を掛けようかどうか、少し迷いました。しかし、勇気を出して話しかけてみることにしました。

「すみません。通行人の小林です。ご迷惑でなければ、一緒に渡りましょうか。」

と言いました。そうすると、

「ありがとう。助かるよ。」

と言ってくれました。だからすぐに、

「腕をお持ちしますね。」

と言って、腕を優しく掴みました。早速横断歩道を渡りました。渡り終わりそうなときに、少し段差があつたので、

「段差があります。気をつけて下さい。」

と言いました。とうとう渡り終わりました。そのとき、

視覚障害者の方が、

「小林さん、だっけ。本当にありがとう。最後に段差があることを教えてくれたので助かりました。」

そう言っつて、僕とその方は別れました。そのあと、家に帰りました。日記を久しぶりに書きました。書いているときに思ったことは、

「交通安全は、単に、自転車で並進をしないとか、そういうことだと思っつていたけれど、どこか不自由な人を助けるということも交通安全になるんだな。」

けでなく、自分自身の考えも変わるようなことになりました。僕はこれから、困つている人を助けていきたいです。これは、どこか不自由な人を助けるということだけではなく、何かなやんでいる人にも手を差し伸べるといふことです。この経験を心に留めて、生活していきたいです。

宮城県仙台市立将監中学校

一年 寺田 寧々

安全な地域をつくるために

母が車の免許更新に行つてきたと話をはじめました。母から伝えられたことは、宮城県の交通事故の多くは高齢者が関わつていて、死亡事故に至つてしまつていふこと。また、車同士の事故などではシートベルトを着用していなかつたほとんどの人が命を失つてしまつていふ現状の話でした。家族でシートベルトの大切さについても話し合い、命を守ろうと確認しました。交通事故から身を守るためには、運転手だけでなく歩行者側も気をつけなければならぬと思ひました。

私の地域には、子どもたちがのびのびと安全に暮らせるようにと願ひ、交通安全活動をしてくださる方々がいふます。毎日小中学生が通う通学路に立つて見守りをしてくださるなど簡単ではないことを私たちの安全のために活動してくださる地域の方々。どのような思ひをもつていふのでしょうか。地域ボランティアを長年されている

日下光雄さんにお話をうかがいました。私がかうかだったことは、二つのことです。

一つ目は、どのような思いでボランティアをされているかと言うことです。日下さんは子供たちが元気に登校したり、遊んでいる姿を見て元気をもらえるので笑顔を守るためにボランティアに取り組んでいるとおっしゃっていました。子供の笑顔を見るのが好きと言ってくださるならば、私たちが日下さんをはじめボランティアをしてくださる方々に元気な姿を届けていけるように私たち一人一人が交通ルールを守り、助け合いながら生活をしていかなければならないと思いました。

二つ目は、ボランティアではどのような活動が行われているかをうかがいました。日下さんは、月に三回から五回集団巡視活動というパトロールを行っているそうです。この活動は、子どもたちがきちんと学んで遊べる安全な地域環境の確保をめざして、行っているということでした。また、この他にも巡視員同士の情報交換を行ったり、小学校や児童館などの施設等を訪問し、反射材の寄付を行い暗い場所での事故の防止など、様々な取り組みを行っていただいていることが分かりました。

このように私たちが安心して通学できるのは、私たちが交通事故から守るために沢山のボランティアの方々を毎日活動してくださっているおかげだと改めて知り、感謝の気持ちでいっぱいになりました。見守ってくくださる方々の思いを受けとめて私たち一人一人が交通安全について学び、横断歩道に車が来ていないかを確認するなどほんの小さなことでも重視して行動することが私たちにできることだと思いました。

日下さんは、「子どもたちは地域の宝なんだよ。」とおっしゃっていましたが、私は日下さんのように地域を支えてくださる方々こそが地域の宝なのだと思います。

発信したい「自中スタイル」

私の母は中学校の地区委員をしている。昨年、今年と二年続けて地区委員をしており、朝の見守り当番や夜間パトロールなどを毎月行っている。特に朝の見守り当番は、今年になって月二回ほどに増えた。母も出勤時間ギリギリなのに、よく引き受けたなあと思議に思った。

ある時、母が地区委員だよりを制作しているのを見て、

「役員の仕事って大変そうだね。」

と声をかけた。母は

「大変なのは大変だけど、地区委員は大事な仕事だと思う。」

と意外な言葉が返ってきた。それから母が地区委員をやってみて思った事や実際体験した事を話してくれた。

実は登校している子達に危ない子はほほいらない、という事だ。これはとても意外だった。きちんと歩道を歩き、左右を確認して横断歩道を渡り、きちんとあいさつまで

してくれるので、当番をしている地域の方もとても感心しているようだ。それを聞いて、私も同じ自中生としてほこらしい気持ちになった。しかし、問題は車の方だと母は言った。左右を確認し、母達が横断旗を上げていても、それを無視して通り抜けて行く車が数カ月に一台くらいはいららしい。また、スピードを出して走って来て、危ないなと思っていたら、中学校に送って行く保護者の車だった、という事が多々あるという。一番怖かったのは、横断歩道を無理矢理通り抜けようとした車が、生徒や見守り当番の保護者ごとひきそうになった事、そして目の前で兄がはねられそうになった事だそう。

一つ上の兄は右耳が聞こえない。通学路の曲がり角で兄が母に手を振って学校に向かおうとした時、猛スピードで静音走行の車が曲がってきたそう。母は大声で兄の名を叫んだそうだが、左しか聞こえない兄の体は、母の声で振り向くのに大きく右側に傾き、車に接触する寸前で車が通り過ぎたそう。目で車を確認した兄も、一部始終を見ていた母も、しばらくその場から動けなかった、と話してくれた。母の表情はとても険しかった。想像しただけで私もぞつとした。

どれだけ気をつけていても、事故が起こらないとは限らない。でもそうならないために、私達は交通ルールを守って登下校し、役員さんや地域の方に見守られ、安全に過ごせている。何かもつと出来る事は無いか尋ねた時、「どこへ行く時でも自中生でありなさい。」

と母は言った。あいさつも交通マナーも良いと評判の私の学校は私のほこりだ。私もまたその一人の生徒として、校区内外問わずその姿を崩さなければ、車も、周囲の方も、そして私自身も気持ち良く安全に過ごせるだろう。私から「自中スタイル」を広げていきたい。

栃木県宇都宮市立横川中学校

二年 知花^{ちばな}愛依^{あい}

ドライバーとのコミュニケーション

私には、今まで最も印象に残っているテレビコマーシャルがあります。それは、栃木県の信号機のない横断歩道の一時停止率が全国ワースト一位（停止率〇・九％）

を返上するためにつくられたものです。車が止まらない栃木県、それが当たり前だと思っていました。

確かに横断歩道でまっけても止まってくれず、車が通ったあとに通ることがほとんどだったことや、一方の車が止まっても反対側の車が止まってくれなかったこともありました。信号機のない横断歩道での交通ルールは、横断歩道を渡ろうとする歩行者がいる場合には一時停止をし、その進行を妨げてはいけないことになっています。横断歩道では歩行者優先だと交通ルールが定められているにも関わらず多くのドライバーが守れていないのは、なぜだろうか。その理由をドライバーである両親に聞いてみました。「自分が止まっても対向車が止まってくれなく危険だから。」「そもそもルールを忘れているドライバーも多いかもしれない。」ということでした。しかし、「最近では、止まってくれる車も多くなったのではないのかな。」その話を聞いて、通学時の横断歩道での一時停止の状況を思い出してみました。そうすると、止まってくれる車が多かったのです。そこで、現在の栃木県の一時的停止率を調べたところ、二〇二一年は、全国二十二位でテレビコマーシャルのおかげで横断歩道では歩行者優先

の交通ルールを守る人が多くなったと感じました。

栃木県の横断歩道での一時停止率は全国二十二位ではあるが、その停止率は三十一%とまだ七割のドライバーは止まってくれない。どうすれば止まってくれるようになるか、またどうすれば止まろうと思ってもらえるか、両親に聞きました。「横断歩道を一時停止をした後に小学生在が横断歩道を渡った後にお辞儀をしてくれた小学生や中学生がいる。そうしてくれると爽やかな気持ちになった。横断歩道では必ず止まろうという気持ちになった。」夕方や夜間は歩行者がいることに気づかないことがある。」という意見がありました。また、インターネットで調べると、「横断歩道に歩行者がいても横断するかどうか分からないから止まらない。」という意見もありました。ドライバーの人たちの意見から考えると、横断するという意思を示すために手を挙げたり、夜間は明るい色の服を着ればドライバーから認識されやすく止まってくれるのではないかと思います。また止まってくれた車には、お礼の行動を示すとドライバーも嬉しくなるとわかりました。

これらは、ドライバーとのコミュニケーションをとつ

ているといえます。

止まってくれない栃木県が少しずつ改善されているように感じています。さらに止まってくれるためにドライバーとのコミュニケーションが必要だと考えられます。歩行者から気付けてもらう工夫、明るい服を着る、手を挙げるなど意思表示をする、止まってくれた車にはありがとうという気持ちを伝える、これらの行動をして、ドライバーとコミュニケーションをとつていこうと思います。

財団法人ハワイ日本人学校レインボー学園

三年 遠藤 あかり

世界の青色信号

ハワイに私は住んでいます。両親の仕事の都合で引越しました。ここで最初に感じたのは「危ないな」というものでした。犯罪が日本よりも多いとかでは、危険な、と感じました。日本での常識が通用しません。日本とは違い、左ハンドル、右側通行という事だけでは

なく、皆の運転が怖いのです。後から知りましたが、ハワイには自動車運転教習所というものがありません。正直、運転が適当です。こちらが交通ルールを守っていて、も交通事故にあう危険があるのです。

そんな時、私に通っている学校で交通事故にあわない為にはどうするか、という授業がありました。みんな得意見を出し、その有用性について議論するというものでした。この授業の結論としては、車を運転する大人にしっかりと交通ルールを守ってもらう、その為に自分達でチラシを作り、配布するという事になりました。

私は、家族にその授業の事、ハワイの車、交通事情は危ないよね、というような事を何の気なく話しました。家族から何かの返答、答えを期待して言ったのではなかったのですが、父が興味深い事を言ってくれました。それは、

「車を気を付けてもらうだけじゃだめだよ、自分達、歩行者も気をつけなきゃ、それが本当に交通事故を無くすことにつながるよ。」

というものでした。父は、日本では警察官でした。その父の言葉はとても重く、納得させられるものがありました。

す。父は、日本で悲惨な交通事故を見てきました。そして、ここハワイでも悲惨な交通事故はたくさんあると父は言っていました。確かに、地元の新聞を読むと、交通事故の記事が目立ちます。

私は日本や世界の悲惨な交通事故について調べました。すると、その交通事故は、薬物を使用した状態での運転や飲酒運転、赤信号無視が数多くありました。つまり、運転手が意図的に交通ルールを無視、守らないことで発生した事故ということです。交通ルールを守り行動しても、このような無法者が罪のない人を傷つけます。

私は思うのです。世界から交通事故をなくすことは難しい、けれど、交通事故の被害を少なくすることはできる、その方法は、犯罪にあわないようにすることと同じだと思います。自分自身で危険にあわないように気を付ける、つまりは、青色信号でも進むときは周囲を確認する、という少しのプラスアルファのような行動です。運転をする人も歩行者も普段の行動でこのようなプラスアルファの行動ができれば、それが交通事故の被害を少なくすることができます、それが、海外で私を感じ実践していることです。

安全の生まれ方

僕の家の前には歩道が通っている。歩行者がすれ違ふのにも余裕がある比較的安全な道路だと僕は思っている。

しかし、一度も危険な目に遭ったことがないかと聞かれたら、答えは「ノー」だ。僕が小学生の頃、玄関から歩道に出る直前におばさんが乗った自転車が衝突された。僕は、いつも両親から、

「歩道に出る前は、一度そつと頭だけ歩道に出して左右をよく見てから歩道に出なさい。」

と言われていたので、その日も歩道の手前で頭だけ出した。そこを玄関と歩道の境界すれすれの所を走ってきた自転車とぶつかったのだ。僕の頭はおばさんの自転車のハンドルにぶつかって赤く腫れたが、おばさんは、

「あぶないじゃないのー！」

と怒鳴って来た。交通ルールについて詳しいことは何も知らなかった当時の僕は、大人にぶつかった子どもの僕

がいけないのだと思い、すぐにおばさんに謝った。近くにいた祖母が急いでやって来て状況を察すると、

「ここはね、十三歳未満の子どもや七十歳以上のお年寄り、それから身体障がい者以外歩道の自転車通行は禁止されているんです。歩道を自転車が行き通る場合でも、歩道の中央から車道よりを走らなくてはならないですよ。」

と、おばさんに淡々と説明した。おばさんはきまりが悪かったのだろうか、謝りもせずにそのまま自転車に乗って逃げるように去って行った。ぶつけられた頭は、しばらくたんこぶになって痛んだが、幸い出血も後遺症もなく、順調に回復したので家族皆が安心した。

最近では、父と車で出かけた時、横断歩道の手前で停車した。見るとそこには歩行者が立っていた。その人は、何度も父に頭を下げて横断歩道を渡って行った。僕は父に、
「お父さんって、優しいね。」

と素直な気持ちで言った。ところが父からは、
「何を言っているんだ。横断歩道に人がいて、車が止まるのは当たり前だ。」

と返って来た。確かにそうだ。僕も自転車に乗る時はそうしているのだから。それなのに当たり前を当たり前だ

と感ずることのできないこの変な感覚は何だろう。

僕が自転車に乗る時は、

「道路は歩行者優先だからね。」

と両親は言うのに、僕が歩いて出掛ける時は、

「信号のない横断歩道を渡る時は、車を先に通してしまいなさい。」

と言うのを思い出した。前者は完全なる歩行者ファーストだ。後者はそれを真っ向から否定している内容に思えるが、こちらはルール違反の運転手から僕を守るための我が家なりの特別ルールと言えるだろう。車両側の「歩行者ファースト」の意識と、歩行者側の「車両の歩行者ファーストを過信しない」意識がパズルのようにぴったりとはまった時、初めてそこに安全は生まれ、守られるのだと僕は思う。

岡山県倉敷市立真備東中学校

三年 白神しらが 咲羽せわ

交通ルールに思いやりを

最近、メディアでよく、信号のない横断歩道に歩行者がいる時に一時停止をしない車がワースト1なのは岡山県だということを目にする。私が小学生の頃は、通学路の横断歩道に地域の方が立ってくださり、車を止めてくれていたので気がつかなかつたが、中学生になり、一人で通うようになると、横断歩道を渡る時に止まってくれない車が多いことに驚いた。家族にこのことを話すと、兄も同じ経験をしていた。父は、そのような交通ルールがあることを知らないドライバーが多いのではないかと言った。母も今まではあまり意識していなかったが、知ってからは止まるようにしていると言っていた。私は、まず、この交通ルールを多くの人が知ることが大切だと思った。ある日、私が横断歩道を渡ろうとすると、一台の車が止まってくれた。おもわず私は、会釈をして横断歩道を渡った。すると、ドライバーも同じように頭を下げてく

れた。私は、とてもいい気分がした。ドライバーはただ、交通ルールを守っただけという思いだったのかも知れない。しかし、私は、そんな当然のことが、うれしかった。そこで私は考えた。交通ルールは、安全に生活するためになくしてはならないもので、絶対に守らなければならぬものだけど、そこに相手を思いやる気持ちを持つことも必要なのではないかと思う。みんなが思いやりの気持ちを持ってハンドルをにぎることで、横断歩道に歩行者がいる時に止まるのはもちろんのこと、スピードの出しすぎや、前方不注意、スマホなどのながら運転などの危険運転がなくなるのではないかと考える。

これらのことから、私は、信号のない横断歩道に歩行者がいる時には、一時停止をしなければならぬという交通ルールを広く知ってもらい、守ってもらうために、まずは身近な人への声かけをしていきたいと思う。そして私自身も自転車に乗っている時に、横断歩道を渡ろうとしている歩行者がいたら一時停止をしようと思う。

また、私がうれしい気持ちになったように、止まってくれたドライバーには、「ありがとう」という気持ちを込めて、会釈を忘れないようにしようと思う。

そんなささやかな行動ですぐに変わるということではないと思うが、一人一人が気を付けて実行していくことで、信号のない横断歩道に歩行者がいる時に一時停止することが当たり前の岡山県になればいいと強く思う。

いつか私も車を運転する日が来るだろう。その時には、交通ルールをしっかり学んで、思いやりの気持ちを忘れないようにハンドルをにぎりたいと思う。

審査を終えて

千葉大学名誉教授 鈴木 春男

中学生の部

交通事故の死者数は年々減少しています。一月四日に警察庁から発表された速報によりますと、昨年（令和四年）に全国で起きた交通事故による死者数は二千六百十人で、前年より二十六人の減少となっています。死者数が一番多かつた昭和四十五年の一万六千七百六十五人に比べると十六%を切っており、統計を取り始めた昭和二十三年以降最も少ない年を六年連続で更新しています。現在は昭和四十五年当時と比べると、車両保有台数も運転免許保有者数も三倍以上になっている中で、死者数が六分の一以下になっているわけですから、これは官民が多方面から連携して取り組んでいる交通事故防止対策のすばらしい成果だと見ることができます。

しかし他方で、年間三千人近い方々が依然として悲惨な交通事故で亡くなっているという事実にも注目しなければなりません。そしてそうした悲惨な事故を無くすためには国民一人一人が自ら進んで交通安全を守ろうとする自発的な行動が不可欠です。

交通安全ファミリー作文コンクール「中学生の部」は、そうした自発的な交通安全行動を動機づける貴重な場である「家庭・学校・地域」の中で、重要な役割を演じてもらわなければならない中学生の意見が伝えられ、本人はもちろん多くの方々にも交通安全の重要性に気づいてもらう機会を提供する大事な事業です。

ただ、昨年度・一昨年度に引き続き本年度も新型コロナウイルスの脅威は依然として治まらず、それへの対応のために多くの学校が多大なエネルギーを費やすことになりました。

特に応募作品の多くは、学校を通じて提出されるケースが一般的であるために、授業がオンラインで行われるようになったり、少なくなった授業時間数の中で、多くの科目を学ばねばならない状況は作文コンクールに応募することにも重大な影響を与える結果になったことは事実です。

そうしたこともあって、本年度の応募総数は三千六百十四点（中学一年生・千三百八十五点、二年生・千三百六十一點、三年生・八百五十三点、学年不明十五点）で、前年度の三千九百九十七点（中学一年生・千五百十六点、二年生・千五百四十五点、三年生・九百二十五点、学年不明十一點）に比べて一割ほど少なくなっています。それでも先に述べた深刻な状況の中で、三千六百十四人もの中学生が一生懸命交通安全の問題を考え、すばらしい作文を提出いただいたということであり、御本人はもちろん、御父母、御指導いただいた先生方、またそれぞれの学校ならびに関係者の方々に心からの感謝を申し上げます。そして次年度こそコロナ禍が治まり、応募数が高まることを期待したいと思います。

今回の審査では、その応募作品の中から、教職経験者や編集経験者、国語の免許取得者等の審査員による予備審査を経て、最終審査に中学一年生、二年生、三年生それぞれ十点ずつ、計三十点が残され、それを本審査（七名で構成）審査員が事前に評価して「審査評価集計表」としてまとめ、さらにその「審査評価集計表」を基に本審査会で厳正な審査・討議を重ねました。その結果、最優秀作（内閣総理大臣賞）一点、優秀作（国務大臣・国家公安委員会委員長賞）各学年一点計三点、優秀作（文部科学大臣賞）一点、佳作（警察庁交通局長賞）七点が選ばれました。

最優秀作（内閣総理大臣賞）は、岡山県の中学二年生、渡邊陽和さんの「交通安全啓発ポスター」でした。描かれたポスターをただ見ることと、ポスターを自ら描くこととは全く異なるのではないか。後者は参加の度合いがより高く、その度合いが高いほどそこで訴えている行為に強く動機づけられる。そこで運転免許証更新の際に、違反のあったドライバーには犯した違反をなくすためのポスターを考え描いてもらったら効果的な

ではないか、という提案がなされ大変素晴らしく深く感銘しました。

次に、優秀作（国務大臣・国家公安委員会委員長賞）ですが、中学一年生からは埼玉県の山崎蓮さんの「七年間続けていること」が選ばれました。信号のない横断歩道を渡ろうとした際、止まってくれた車に必ずお礼の気持ちを表す筆者の行為が、友人たちにも伝搬していった過程が上手に描かれていました。さらに小学生の頃からそれを教え、習慣づけている他県の例を引きながら、その有効性を伝えている説得力のある作品でした。

中学二年生からは愛知県の中根壱弥さんの「祖父から学んだ交通安全」が選ばれました。元交通警察官だった祖父から教えられた交通安全のための教訓を、小さい頃から守っている筆者の素直な行動と、孫の安全のためにクイズ形式の質問まで工夫して、安全を守ろうとする祖父の温かさが描かれている作品でした。

中学三年生からは愛媛県の横山颯空さんの「準備の大切さ」が選ばれました。クラブ活動のメンバーと一緒に自転車ですべて走っていて転倒した友人の事故をめぐって家族と話し合い、そうした事故を防ぐにはルートの下調べ、時間のゆとり、車間距離をとって走ることなどの重要性を痛感する。そうした過程がとて上手な文章で描かれている作品でした。

優秀作（文部科学大臣賞）には、栃木県の中学一年生、岩佐葵さんの「母と決めた通学路」が選ばれました。中学生になり自転車通学することになった筆者が、どのルートで通学するかを母と一緒に試走しながら決めていった過程がとてよく描かれており、さらに我が子の交通安全を自分も責任を持って守っていかうとする母親の姿勢も模範とすべきよい作品だと思いました。

佳作（警察庁交通局長賞）には以下の七作品が選ばれました。栃木県の中学一年生、小林奏和さんの「横断歩道」は、両親との対話の中で、視覚障害者の横断を助ける行為の大切さを感じた筆者が、そうした場面に直面した際に勇気を持ってそれを実行した結果、困っている人に手を差し伸べることの意義をさらに強く実感する過程が述べられている心温まる作品でした。

宮城県の中学一年生、寺田寧々さんの「安全な地域をつくるために」は、交通安全ボランティアの方からの話を聞きながら、自分たちが如何に助けられ恩恵を受けているかを理解した筆者が、そうした行為に感謝し報いるためには、自分たちが自ら交通ルールを守り安全に気を配らなければならないと決意する点がとてもよく示されている作品でした。

福岡県の中学二年生、伊賀崎望さんの「発信したい『自中スタイル』」は、交通安全を守る地区委員を引き受けている母との対話を通じて、自校生徒の模範的な交通行動に誇りを持つと同時に、心ないドライバーの危険な運転行為、特に兄の危険体験を聞いて自校のスタイルを社会に広げたいと決意する点が素晴らしいと感じました。

栃木県の中学二年生、知花愛依さんの「ドライバーとのコミュニケーション」は、信号のない横断歩道で歩行者に対し一時停止する車が自分の県では極端に少ないというコマーションを見て、その理由と対策を両親と話し合った結果、歩行者の側にも停止してくれたドライバーへの感謝の気持ちの表現と、渡りたい意思を示す行為が必要なことに気付く過程が大変よく描かれていました。

ハワイ在住の中学三年生、遠藤あかりさんの「世界の青色信号」は、学校で交通事故にあわないために何が必要かを話し合う授業があり、そこでは運転する大人にルールを守ってもらうことが大事だという結論に達したが、日本で警察官だった父から歩行者の注意も必要なのではと諭される。そこから自分自身が安全に気を付ける必要性を痛感する過程が描かれていてよい作品でした。

埼玉県の中学三年生、嶋屋勝仁さんの「安全の生まれ方」は、車や自転車はルールに基づいて歩行者を優先し保護する必要がある。しかしもう一方で歩行者はそれに甘んじず、それを過信せず、最大限の注意を払って自らの身を守る。そうした二つの動きがマッチして初めて交通安全が生まれることを述べている説得力のある作品でした。

岡山県の中学三年生、白神咲羽さんの「交通ルールに思いやりを」は、信号のない横断歩道にそこを渡りたい歩行者がいる時、車は一時停止をしなければならぬことは交通ルールで決められているが、それが確実に守られていくためには、相手を思いやる気持や相手に感謝する人間的なやり取りが必要なことを実例をもつて述べており、中学生らしい素直な作品でした。

最後に、数多くの応募作品の読み込みと絞り込みに御尽力いただいた予備審査員および事務局の方々、さらにまた本審査会において真剣かつ厳正な審査に当たっていただいた審査員の方々に心からのお礼を申し上げます。最終審査の報告とさせていただきます。

令和4年度交通安全ファミリー作文コンクール審査員
— 中学生の部 —

(敬称略、順不同)

鈴木 春男	千葉大学名誉教授
溝端 光雄	交通評論家
平井 邦明	全日本中学校長会会長
吉岡 耀子	交通・環境ジャーナリスト
友竹 明彦	公益財団法人三井住友海上福祉財団専務理事
安里賀奈子	文部科学省総合教育政策局 男女共同参画共生社会学習・安全課長
日下 真一	警察庁交通局交通企画課長

※本作品集に掲載する作文は、作者の体験に基づく作品のオリジナリティを尊重する見地から、明確な誤字等以外は原文のまま掲載しています。

本作品集の転載については、次の条件をいずれも満たす場合に限り認めることとします。

- ①交通安全知識の普及、交通安全思想の高揚のために使用すること。
- ②営利を目的としないこと。
- ③転載誌(紙)等を警察庁交通局交通企画課担当あてに送付すること。

令和4年度交通安全ファミリー作文コンクール
優秀作品集

令和5年2月

発行 警察庁

〒100-8974 東京都千代田区霞が関 2-1-2

